

令和7年度

校内研究報告会資料

研究テーマ

地域とともにある学校を目指して
～地域の資源を活用した授業づくり～



目次

令和7年度本校研究について	1～2
令和7年度各学部部門 年間研究計画	3
A（肢体不自由教育）部門	A-1～A-11
小学部B（知的障害教育）部門	小B-1～小B-17
中学部B（知的障害教育）部門	中B-1～中B-9
高等部B（知的障害教育）部門	高B-1～高B-11
高等部B（知的障害教育）部門 分教室	高分-1～高分-10

本校の校内研究について

研究研修チーム

1 テーマ

「地域とともにある学校を目指して～地域の資源を活用した授業づくり～」

2 設定の理由

教育長より示された令和6年度から4年間の「学校のミッション」に、新たに「地域とともに」というキーワードが加わった。それを受け、より一層地域を意識した学校経営を進めるため、4年間の学校教育目標を「一人ひとりの教育的ニーズを受け止め、地域との協働を通して自立と社会参加の基礎となる生きる力を育む」と設定した。コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、地域との交流が難しい時期もあったが、近年、感染症対策が緩和されたことを受け、改めて児童生徒が地域で生きていくために必要な力やそれを培っていくための授業の整理や実践を積み重ね、自立と社会参加の基盤を作っていくことが必要だと考え、研究テーマとして設定した。

3 研究単位

各学部部門で設定している。各学部部門内で、複数のグループを設定しても良いこととしている。

4 研究方針

- ①各学部・部門で設定したサブテーマをもとに、地域の資源を活用した授業づくりを実践し、成果と課題を評価し分析する。
- ②地域に関連する活動を含む授業の整理(単元や年間指導計画の整理など)を行う。
- ③実践した内容について、研究日等で共有する。
- ④取組の成果・結果を研究発表会で報告・共有し、本校の教育活動に生かす。

5 1年目の研究について

(1) 研究の方針について

各学部部門でサブテーマを設定し、方向性を定め、研究を進めてきた。既存の学習活動の中で、活用してきた地域の資源について整理をしたり、新たに活用できそうな地域資源について検討し、どのように授業で活用していくか考えたりしてきた。また、学部部門によっては、地域に学校のことや、通う児童生徒のことを発信したり、ともに生きる社会の実現に向けて、協働をどのように進めていくか検討したりするところもあった。

1年目は、学校全体で研究を進め、多角的な視点で協議を行えるよう、管理職や総括教諭、専門職や看護師等も各部門学部に所属するように体制を整えた。

(2) 中間報告会

各部門学部で改善や検討を重ね、研究内容の1年目の成果や課題について中間報告会を行った。他学部・部門がどのように地域の資源を活用した授業づくりについて検討し、地域とともにある学校づくりを目指したかを共有した。助言者より、検討した地域に関連した授業内容が、教育課程のどこに当てはまるのか、今一度確認する必要がある等の助言をいただいた。

(3) 課題と成果

各研究グループがそれぞれの視点で、地域の資源を活用した授業づくりについて研究を進めてきた。学部・部門によって、これまでどれだけ地域と関わった授業や活動があったかなどには差があ

るものの、地域の資源について整理をしたり、実践の中に落とし込んだりすることができた。地域と関わる中で、謝礼や交通費などの支払いができないために、計画段階で断念せざるを得ない状況も垣間見えた。しかし、その様な中でも、新たに繋がりをもつことができた団体もあった。今後の課題としては、今年度計画や作成したフォーマットの活用や、授業内容の教育課程上の位置付け、交流を考えている団体への謝礼や交通費の予算化、今年できた繋がりを今後も継続的に行っていくこと等が挙げられる。

6 2年目の研究について

昨年度の研究の妥当性を確認するために、各部門学部がサブテーマに沿って実践を積み重ねた。研究日の記録及び、チーム会にて研究の進捗状況をチーム員が共有し、部門学部間での情報共有も行った。実践を積み重ねる中で見えてきた成果と課題についての評価と分析は、研究発表会にて報告・共有を行う。

7 考察と今後の課題

今年度は、学校全体の研究テーマである「地域とともにある学校を目指して～地域の資源を活用した授業づくり」のもと、各部門学部がサブテーマに沿って単元づくりを行い、授業を実践してきた。実践の中で、マップを作製したり、職業の授業や防災学習に焦点を当てたり、実践内容をデータ化して、次につながるようにしたりと、各部門学部の特色や工夫が見られた。様々な形で地域と関わる授業づくりを検討し実践する中で、それぞれ一定の成果が見られた一方、地域との相互的な関わり必要性や困難さ、継続的な交流の必要性等、共通の課題も見えてきた。地域で暮らしていく児童生徒たちの自立と社会参加に向けて、地域との協働は、研究のテーマが次年度以降変わったとしても、教育活動において、継続的に大切にしていかななくてはならないことである。2年間の研究の中で見えてきた成果と課題についての評価と分析内容を、各部門学部間で共有し、学校教育目標である「一人ひとりの教育的ニーズを受け止め、地域との協働を通して自立と社会参加の基礎となる生きる力を育む」の達成に向け、引き続き教育活動に生かしていく必要がある。

令和7年度 神奈川県立金沢支援学校 各学部部門 年間研究計画

学校テーマ 「地域とともにある学校を目指して～地域の資源を活用した授業づくり～」	
設定理由	令和6年度からの4年間の学校教育目標として「一人ひとりの教育的ニーズを受け止め、地域との協働を通して自立と社会参加の基礎となる生きる力を育む」が示された。近年はコロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、地域との交流が難しい時期もあったが、感染症対策が緩和されたことを受け、改めて児童生徒が地域で生きていくために必要な力やそれを培っていくための授業の整理や実践を積み重ね、自立と社会参加の基盤を作っていくことが必要だと考え、研究テーマとして設定した。
研究方針	校内研究への取り組みは2年単位。各学部部門単位でサブテーマを設定し、研究を進める。1年目は、各学部・部門サブテーマを検討し、それに応じた研究を積み重ねて外部教育機関の方を助言者から助言をいただく機会を設定する。また研究の中間まとめ冊子作成及び中間報告会を行う。2年目は、1年目で出た課題や改善点を踏まえて各学部指導内容の整理を行う。研究発表会で「研究のまとめ」冊子を用いて系統性のある指導における検証結果を共有・討議し、本校の教育課程に基づく教育活動の充実を目指す。

※「肢体不自由教育部門」のことを「A部門」、「知的障害教育部門」のことを「B部門」と表記している。

学部	A部門 小学部	A部門 中学部	A部門 高等部	B部門小学部	B部門中学部	B部門高等部	B部門高等部 分教室
対象授業	各教科			各教科等	各教科等	各教科等	職業、体験実習等
研究内容	「『地域と共に』の単元づくり」 ①近隣校外学習や、並木小交流等を通して、地域を知る、地域に知ってもらおうことを目指す。 ②「地域交流」を通して、地域に本校の存在を知ってもらい、お互いの理解と認識を深める。 ③「防災教育」を通して地域とのかかわり方を深め、授業実践を積み重ねる。			「地域とのつながりを通して」 ①学校目標や学部指導目標を参照して、地域の資源を活用した授業づくりで児童に身に付けさせたい力を明確にしていく。 ②授業の振り返りや、他教科との関連を意識して授業改善を行う。	「ゲストティーチャーを活用した授業づくり」 ①地域の人材を活用した授業実践を通して、継続的・効果的に行うための具体的な方策を検討する。	「地域との連携・協働を目指した授業を考える」 ①昨年度から継続し、地域の社会資源を生かし、連携・協働を目指した授業を考え実践していく。 ②実践事例を積み上げる。	「よりよい実践へ～教育課程との融合を考える」 ①昨年度の実践を含む「職業」年間指導計画および「職場体験実習」単元計画を、分教室の教育課程や学習指導要領をより反映したものへとブラッシュアップする。 ②他分教室の実践に関する調査をする。
研究方法	①継続的な近隣校外学習や交流を行い、地域の資源を活用する授業を実践する。 ②地元大学のサークルとの関りを重ねていくことで、授業実践につなげる。 ③系統的な指導の実践につなげるため、学部間での情報の共有を行い、次年度の年間計画に反映させる。			①fig jam を活用し地域とつながるマップを作成する。 ②地域とつながる実践事例集との関連性(授業づくり)を深めるために、年間指導計画や各学年内容一覧表に1年間の取り組みを記載する。 ③系統性のある授業づくりをするために、事例集と授業案をセットで検討する。	①ゲストティーチャーを活用した授業を実践し、学部全体で情報共有と振り返りを行う。 ②効果的な授業を実施するために必要な事前確認項目を整理し、書式にまとめる。 ③授業を依頼した地域の人材のリストを作成する。継続的な実施に向け、リストにどのような情報があればよいか検討する。	①各学年での実践をフォーマットに記入し、各学年での取り組みを分かりやすく表記することで、系統性を考える。 ②昨年度、各学年で調べた今までの高等部の地域と関わった授業実践を整理し、まとめる。	①過去の「職業」の年間指導計画からねらいをピックアップし、学習指導要領「職業・家庭・自立活動」のねらい・内容と関連付け、あらたに3職種共通のねらいを作成する。昨年度の職場体験実習をふまえ、今年度の単元計画を作成する。その際、必要な学習内容のリストアップや、出された項目と学習指導要領との関連付け作業を行う。できあがった単元計画を実施し振り返りを行う。 ②昨年度作成したアンケート項目について再検討する。

A（肢体不自由教育）部門

1 A部門サブテーマ

「地域とともに」の単元づくり

神奈川県が「支援教育」「インクルーシブ教育」を掲げ、障害のある児童生徒への理解は少しずつ広がりつつある。本校でも居住地交流や近隣校との学校間交流など、地域とのつながりを築く取り組みが行われてきた。一方で、肢体不自由教育部門（A部門）の児童生徒は、登下校がスクールバスや送迎中心となりやすく、日常の中で地域の方と挨拶を交わしたり、顔なじみになったりする機会は限られがちである。また校外に出るためには、車いす介助者の確保、医療的ケア児童生徒への看護師同行、天候や体調への配慮など、複数の条件を整える必要があり、学習の一環として地域へ出向く活動を継続的に実施することには難しさがある。

そこでA部門では、昨年度より「地域とともに」の視点を授業づくりに位置づけ、各学部の実態に応じて、地域資源を活用した単元づくりを試みてきた。今年度はその継続として、小学部では近隣校外学習を軸に「地域を知る・地域に知ってもらう」経験を積み重ね、中学部では校外活動が難しい実態を踏まえて地域の大学生を招いた交流を発展させ、高等部では防災学習を通して地域の資源や人とつながる体験的な学習の充実を図った。これらの実践を通して、校外に出ることだけに限定しない「地域との関わり」のあり方を整理し、学部間で情報共有しながら、小・中・高で系統性のある「地域とともに」の単元づくりを検討することにした。

2 目的

- (1) 地域の資源を活用した、「地域とともに」の単元づくりを行い、地域との関りを授業に取り入れる。
- (2) 各学部で情報共有を行い、系統性のある単元づくりにつなげる。

3 方法

- ・各学部で、地域の資源を活用した単元づくりを行い、授業を実施する。
- ・研究日等で情報共有を行う。

4 経過・結果

(1) 小学部

小学部は、1年生から6年生まで、24人が在籍しており、児童のほとんどが車いすを使用している。医療的ケアが必要な児童や、訪問籍の児童がいたり、独歩や会話が可能な児童がいたり、実態は幅広く、さまざまである。

昨年度は、地域と共にある学校を目指すにあたって、「地域に知ってもらうこと、地域のことを知ること」を目標に、各学年が近隣校外学習を取り入れた単元づくりを行い、授業を行った。今年度も引き続き、近隣校外学習を取り入れた単元づくりを行うことや、近隣の小学校との交流を行う中で、地域の人たちに自分たちのことを知ってもらう、自分たちが学校の周辺に慣れることを目指した。

授業：せいかつ 単元名「はがきを出そう」（1・2年生）

小学部1・2年生は、せいかつ「はがきを出そう」という単元の中で、暑中見舞いや学習発表会の案内状、年賀状を作成し、ポストに出しに行く活動を行った。校内のポストを模した箱に入れる体験から始め、買い物学習で利用するスーパーにあるポスト、南部市場内にある郵便局と、近隣校外学習で訪れる場所の範囲を徐々に広げていった。ポストにはがきを投函するという活動を通して、

校外を散策することで、学校生活が始まったばかりの1. 2年生が、学校周辺の地域を知る、地域に知ってもらいきっかけの一つになればと考えた。

「はがきを出そう」単元計画

日程	内容・その他	
7月	<暑中見舞い> ・暑中見舞いを作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・はじき絵をして、海の中を描き、暑中見舞いはがきを作成する。 ・校内のポストを模した箱に投函する体験をする。
7月	・はがきを出そう	
11月	<学習発表会招待状> ・学習発表会の招待状を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・スタンプを用いてはじき絵をして、学習発表会の招待状を作成する。 ・相鉄ローゼン前にあるポストに投函しに行く。
11月	・はがきを出そう	
11月 12月	<年賀状>（1～4年生） ・年賀状を作ろう ・はがきを出そう	<ul style="list-style-type: none"> ・足形をとって馬を描き、年賀状を作成する。 ・南部市場内にある郵便局に年賀状を出しに行く。

【はがきを出そう】

ねらい ①はがきをポストに入れる経験を積む。

②複数個所のポストに行くことで、学校周辺の様子を知ることができる。

③はがきが家に届く仕組みを知ることができる。（4年生）

初回は、校内に設置したポストを模した箱を用いて、はがきをポストに入れる練習をした。2回目、学習発表会の招待状は、近隣校外学習を行い、買い物学習でも行ったことのあるスーパーマーケットに行き、敷地内に設置された郵便ポストに実際に投函した。少しずつ近隣校外学習で訪れる場所の範囲を広げていき、3回目には、横浜南部市場内の郵便局に出しに行った。

○成果

・校外に出ることに不安を抱く様子の児童がいたが、短い距離から始めたことで、近隣校外学習への見通し（校外に出る→楽しい経験する→学校に帰る）を持つことができ、回を重ねることに笑顔で校外に出られるようになった。

・複数のポストを目的地にすることで、ひとつの単元の中で学校周辺の散策を行うことができた。

・すれ違う人とあいさつを交わしたり、店員さんに声をかけてもらったりして、地域の人との関わりを持つことができた。

○課題

・継続的な交流につなげていくための工夫が必要。

○まとめ

小1. 2年生が行った単元「はがきを出そう」のほかにも、近隣の公園に出かけたり、スーパーマーケットに買い物に出かけたりと、各学年が近隣校外学習等で地域に出かけて活動を行った。学部全体で、昨年度と同程度の回数の近隣校外学習を行うことを目指したが、クラス編成で医療的ケ

アのある児童の所属数や、全体の人数配置等が変わったことで、簡単に校外に出られない場面も見られ、なかなか実現が難しい面もあった。

毎年行っている並木第一小学校との交流学习の中では、4年生同士がボッチャで交流するほか、朝の会等の時間に、学部全体が交流することができた。昨年度は、交流後に作品展に招かれて訪れたり、4年生がイベントに招待されて参加したりし、その際に「交流で会ったね。」と声を掛けられる等、継続的な交流が実を結び始めたと感じられる場面もあった。今年度も引き続き、行事としての交流学习にとどまることなく、継続的な交流を行っていきとよい。

地域を知る、地域に知ってもらうため、積極的に校外に出て活動をするということを単元に盛り込むことができた学年がある一方で、なかなかそれが困難な学年もあった。それをふまえ、3学期には、地域の方たちを招いて、昨年度校内のみで行っていた単元「カフェをひらこう」を拡大して行う予定である。校外に出ることだけが地域の資源を活用した単元づくりの方法ではないということを変更して念頭に置いたうえでの単元づくりの必要性を強く感じている。どのような形であれ、小学部段階でできる継続的な交流を行い、地域を知る、地域に知ってもらうことを目指すことで、中学部高等部と今後も続いていく地域との交流の土台を築いていきたい。

(2) 中学部

中学部1年2名（通学籍1名、訪問1名）、2年6名（通学籍4名、訪問2名）、3年3名

本研究時授業で行った「交流学习」は中学部全体で行う授業である。学習グループの実態としては、自立活動を中心の教育課程の生徒がいる集団である。日常生活面では、車いすでの移動が主であるが、歩行器、SRC-Wや独歩、介助歩行での移動が可能な生徒がいる。また、人工呼吸器の管理や医療的ケアを日常的に必要とする生徒がいるなど安全面、体調面等で配慮が必要である。活動の際は、全体への言葉の説明と併せて、個別の言葉かけや具体物、写真の提示等の支援を行うと学習に取り組める生徒、言葉かけで動きを促したり、肘や手首などを支えたりしながら一緒に活動を行うことができる生徒がいる。繰り返し学習することで、見通しをもって安心して取り組む様子が見られる。コミュニケーション面では、簡単な言葉でのやり取り、発声、表情、手をたたくなど各自の方法で気持ちを表出している。

中学部では、医療的ケアが必要な生徒が外出する際に看護師の付き添いが必要であること、暑さ寒さなどの天候の変化により体調を崩しやすく配慮が必要な生徒が在籍していることから、校外行事や学校周辺の公園やスーパーなど地域資源を活用する活動を実施することが条件的に難しいことが多い。

これらの実態から、校外活動が難しい中でも地域とつながる機会をつくる必要があると考えた。そのような状況の中ではあるが、地域との関わりを持ち本校の存在や取り組みを知ってもらいたいという目標に向けて、中学部では地域の方に来校していただき交流していこうと考えた。生徒たちと年齢が近い世代と関わる機会を作りたかったこともあり、昨年度より関東学院大学のダンスサークルBEP-HOPとの交流を設定した。

日頃の音楽や体育等の授業では、ダンスや器楽演奏、歌唱、手遊び歌などに取り組んでいる。曲に合わせて発声したり、楽器のリズム打ちをしたりする生徒、自分なりの方法で身体を動かして活動に取り組む生徒がいるなど、表現活動に興味関心が高いことから、この題材で交流をしたいと考えた。

交流の内容は①ダンス鑑賞 ②ダンス発表 ③みんなでダンスの流れである。大学生のダンスを鑑賞するだけでなく、授業で練習を重ねたダンスを発表する機会を設ける。また交流に来てくれた感謝の気持ちを込めて、制作活動を生かしてプレゼント作りを行う。授業を通して、本校を知ってもらうこと、地域の方と交流の幅が広がるようにしたいということで昨年度に続き、今年度も引き続き取り組むことにした。

○ねらい

- ① 授業を通して、大学生との交流を深める。
- ② 曲に合わせて身体を動かすことの楽しさや心地よさを表現する。
- ③ 地域の人たちに本校の存在や取り組みを知ってもらう。

〈交流の取り組み〉

日 程	内容・その他	
9/ 2 (火)	ダンス練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昨年度の交流会の動画を見る。 ・ 交流の際に発表するダンスについて知る。
9/11 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ 封筒作り（紙に模様をつける）
9/18 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ 封筒作り（紙に模様をつける）
9/25 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ 封筒作り（生徒の実態に応じて封筒を折る、テープ貼り、スタンプ押し等）
10/ 2 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ 封筒作り（生徒の実態に応じて封筒を折る、テープ貼り、スタンプ押し等）
10/ 9 (木)	ダンス練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンス練習に取り組む
10/16 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポストカード作り（指紋スタンプ）
10/17 (金)	ダンス練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンス練習に取り組む （ダンスサークルと事前合同授業）
10/30 (木)	プレゼントを作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポストカード作り（指紋スタンプ）
10/30 (木)	ダンス練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンス練習に取り組む
11/ 4 (火)	ダンス練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンス練習に取り組む ・ BEP-HOP 大学祭の発表動画視聴
11/ 5 (水)	ダンス交流会（当日）	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンスを鑑賞する。 ・ ダンスの発表をする。 ・ 一緒にダンスをしよう。

〈授業の様子〉



プレゼント作り 1



プレゼント作り 2



事前合同授業



交流 - ダンス発表



交流 - ダンス観賞



交流 - みんなでダンス

月 日	時間	地域	対象	学習内容
7月4日(金)	AM		Ⅲ	地震体験
11日(金)	AM		全	引き上げ訓練練習
18日(金)	AM		全	2階への引き上げ訓練
9月5日(金)	AM		全	引き上げ訓練振り返り 2F避難方法カードづくり
8日(月)	AM	○	全	避難生活体験 発電機、ダンボールベッド体験①
9日(火)	AM	○	全	非常食喫食①(アルファ化米、えいようかん)
11日(木)			Ⅱ類	煙体験
12日(金)	AM		Ⅲ類	避難生活体験
18日(木)	PM		Ⅱ類	清潔: ペットボトルシャワー、紙石鹸づくり
19日(金)	AM		Ⅲ類	体験(ドライシャンプー、清拭シート、歯磨きシート)
25日(木)	AM		Ⅲ類	避難生活体験 暑さ対策 保冷剤作り(尿素+水)
26日(金)	AM		Ⅲ類	避難生活体験 ペットボトルランタンづくり
10月2日(木)	AM	○	全	避難生活体験 発電機、ダンボールベッド体験②
	PM		Ⅱ類	発表原稿作り
3日(金)	PM	○	全	非常食喫食②(野菜スープ、非常食カレー)
8日(水)	AM	○	全	地域の放水訓練に参加
9日(木)	PM		Ⅱ類	発表原稿作り
10日(金)	PM	○	全	防災学習発表

昨年度の成果と課題を踏まえ、体験的活動の充実と授業改善を重視し、10~11月に地域の方との防災学習を6回実施した。

(1) 避難所生活体験①

地域の方2名に見学してもらい、段ボールベッドに横になり、アルミシートを布団代わりに使用する体験を行った。

また、校内のガスボンベ式発電機を使い、投光器の点灯や扇風機の使用を体験し、避難所の生活環境を具体的に感じられるようにした。

地域の方から体験方法について助言を頂いた。



(2) 非常食喫食体験①

アルファ化米の調理、アイラップを使った炊飯体験を行い、アルファ化米とえいようかんを実際に食べる体験を行った。

地域の方2名に参加してもらい、生徒の食べられる食形態や摂食の様子を見学してもらった。



(3) 避難所生活体験② (改善後)

①での教員・地域の方の反省を生かし、段ボールベッドの簡単な組み立てから生徒と一緒にを行う活動に改善した。

「体験する」だけでなく「組み立てる」ところから取り組むことで生徒の参加意識が高まった。



(4) 非常食喫食体験② (改善後)

前回と同様に調理を行い、今回は非常食のカレーと野菜スープを喫食した。

栄養注入で食べられない生徒も、匂いをかぐ、調理に参加する、食べてもらう人を選ぶ等、それぞれの形で参加した。



(5) 地域の放水訓練に参加

学校近隣の富岡東団地の放水訓練に高B2年生と高A1～3年生が参加。マンホールと消火栓のつなぎ方の説明を聞いたり、実際にホースを一人ずつ持たせてもらい放水体験をしたりすることができた。



(6) 学習のまとめ・発表

消防署の署長を招き、これまでの防災学習をスライドで発表した。Ⅱ類の生徒は原稿を作成し発表し、Ⅲ類の生徒はスイッチを使って「非常食がおいしかった」「段ボールベッドが気持ちよかった」などを表現することができた。

所長から称賛の言葉をいただき、生徒にとって達成感のある学習となった。



○成果

1) A部門として防災学習を系統的に整理し、年間指導計画に組み込めた

昨年度の研究では、防災学習が学部ごとに個別に行われており、A部門全体としての系統性が十分でないことが課題として挙がっていた。今年度はその点を踏まえ、A部門全体で「どの学年段階で何を指導するか」を協議し、ねらいや内容の整理を行った。その結果、防災学習を3学部で連続性のある学習として扱う見通しが共有され、R8年度の年間指導計画に位置付けることが可能となった。

2) 地域とつながる活動を取り入れ、生徒の理解を促進できた

防災倉庫の見学、消防署長の講話、高等部での避難所生活体験など、地域と協力した活動を実施することができた。実際の機材や専門的な話に触れる機会が増えたことで、生徒が防災についてより具体的に考えられるようになった。

3) 地域からの肯定的な評価が得られ、学校としての取り組みの方向性が確認できた

授業後のアンケートでは、「良い活動だった」「次の機会も協力したい」という声をいただいた。また、「災害時は電源確保が重要である」など専門的なコメントも寄せられ、学校側が防災学習の内容を見直す際の参考になった。

○課題

1) 学部間で学習内容の重なりや不足を引き続き検討する必要がある

系統性の基本的な枠組みは整理できたものの、具体的な内容については十分に話し合うことができなかった。今後は年間指導計画に基づき、次年度以降活動内容の調整を進める必要がある。

2) 個々の生徒に合わせた防災学習の方法を検討する必要がある

身体機能や医療的ケアの状況により参加方法が異なるため、生徒一人ひとりが参加しやすい体験内容や環境設定を工夫していく必要がある。

○まとめ

本研究では、A部門全体で防災学習を整理し、年間指導計画に明確に位置付けることができた。また、地域と連携した体験活動を実施し、生徒の学びに広がりをもたらす取り組みが行えた。地域からのフィードバックも得られ、今後の方向性を検討する上で参考となった。

今後も地域との連携を続け、防災学習を学校全体の取り組みとして定着させていきたい。また防災学習の案内ポスターを作成し、地域への周知や参加につなげる等、学校の取り組みを地域に知ってもらえるような方策についても今後も継続して検討していく必要がある。

5 考察とまとめ

本校A部門は児童生徒数が比較的少なく、小学部から高等部までが連携しやすいという特性がある。年齢幅や実態の多様さから、活動内容や目標設定に難しさを伴う一方、学部間での情報共有や意見交換が行いやすいことは、「地域とともに」の単元づくりに系統性をもたせるうえで大きな利点である。

今年度の実践からは、各学部の実態に応じた「地域とのつながり方」を具体化できた点が成果として挙げられる。

小学部では、はがきを投函する活動を軸に、校内での模擬体験から近隣のポスト、郵便局へと段階的に範囲を広げることで、校外に不安を抱く児童も見通しをもって取り組みやすくなり、散策を通して地域の様子に触れ、挨拶や声かけといった小さな関わりが生まれた。

中学部では、昨年度の交流を基盤として事前合同授業を設定した結果、生徒の意欲や主体的な反応が高まり、他学部の参加も得て一体感のある交流へと発展した。さらに、大学祭の発信など、学校内にとどまらない「地域への還元」を意識した取り組みも試みられた。

高等部では、防災学習を通して、地域資源を「知る」段階から「体験する」段階へ学習を広げ、避難所生活体験や非常食喫食体験など、生徒が参加できる体験的内容を充実させる方向性が明確になった。

一方で課題も整理された。第一に、医療的ケアや体調面の配慮、人員配置等の条件により、校外活動の実施が学年・集団によって左右されやすく、同程度の実施回数や継続が難しい場面がある。第二に、交流を継続するためには、相手側（大学生等）の負担軽減や日程調整、事前共有（生徒の特性・安全配慮・関わり方）の工夫が不可欠である。第三に、小学部では「交流を継続的な関係へつなげる工夫」、中学部では「学部内で交流目的・ねらいの共有をより丁寧に行うこと」、高等部で

は「体験を通した理解をどう評価し、次の学習につなげるか」といった、学習の質を高めるための視点が求められる。

以上を踏まえ、今後は「校外に出る」ことを唯一の方法とせず、①地域へ出向く学習（近隣校外学習等）、②地域の方を招く学習（交流・出前授業等）、③地域とつながる学習（発信・共有・参加の工夫）を児童生徒の実態に応じて組み合わせながら、各学部の実践を相互に参照できる形で蓄積していくことが重要である。部門全体で年間指導計画の段階から「地域との関わり」を位置づけ、実施条件や安全配慮の整理、連携先との調整手順の共有等を進めることで、小・中・高の発達段階に応じた系統的な「地域とともに」の単元づくりを一層推進していきたい。

小学部B（知的障害教育）部門

1 小学部B部門サブテーマ

「地域とのつながりを通して」

2 テーマ設定の理由及び仮設（＊）

昨年度までの研究では、学校全体のテーマである「地域とともにある学校を目指して～地域の資源を活用した授業づくり～」という全体のテーマを受け、小学部としてのサブテーマを「地域とのつながりを通して」とし、①小学部として、地域とつながる・地域に貢献できるつながりとは何かを考える事。②地域とつながる為に、学部としての共通教材を作成する事。（小Bステップ表・学習指導要領も活用）この2点に重点をしぼり研究を進めていった。①については、近隣歩行や近隣校外学習時に、機動隊の方や保育園の児童と挨拶を交したり、近くの南部市場で買い物学習をしたり、富岡総合公園の管理事務所のスタッフの方に昆虫についての出前授業をしていただいたり、公園での落ち葉プールの活動に参加する等地域を活用することで、地域の人とつながる・地域を知るという活動を進めてきた。②については、学部としての共通教材として「地域とつながる実践事例集」を作成し、地域に出かけるきっかけを作るツールとして内容を精選したり、内容に地域とのつながりポイントや小学部段階で身につけさせたい力等を入れることで、事例集の活用を目指した。

今年度は、昨年度の研究を活かしながら以下の2点に重点を置いて研究を進めていくことにした。

① 「地域とつながるマップの作成と活用」

児童、教員にとって使いやすい事例集になるよう、写真や地域とのつながりポイント等を入れて分かりやすいよう作成し、各学年で活用していく。更にFig Jamも活用しながら児童や教員にとっても使いやすいようなツールを考える。

② 「地域とつながる実践事例集との関連性（授業づくり）を考える」

- ・日常生活でも活かせるような学習の取り組みを考え、振り返りをしながら実践的な授業づくりをしていく。
- ・系統性のある授業づくりを目指し、年度当初に年間指導計画に「地域との関わり」についての項目を入れるようにしていく。

上記2点を重点課題とし「地域とつながる」「地域とつながる為に何ができるのか」について更に深めていきたいと考え本研究を進めることとした。

3 グループの重点的取り組み内容

- ・共通のフォーマット（地域とつながる実践事例集）を用いて、各学年の実際の取り組みとその振り返りをfig jamで共有し、活用していく。
- ・系統性のある授業づくりを目指し、年間指導計画への位置づけや、フォーマットとの関連性（授業づくり）を考えながら実践的な授業づくりをしていく。

4 研究の方法及び経過

<方法>

共通のフォーマット（地域とつながる実践事例集）を用いて各学年の取り組みを共有し、それらを年間指導計画への位置づけや、フォーマットとの関連性（授業づくり）を考えながら小学部としての地域貢献のつながりを見出だしていく。

<経過>

- ・年度初めは、昨年度までの反省を踏まえ学部として1年間を方向性の決定。
- ・「地域とつながるマップ」の作成についての検討。
→Fig Jamの活用をしていく。
- ・学部としての共通フォーマットとの関連性（授業づくり）を考え、実践的授業づくりの検討。
→年度当初に、学部・学年として年間指導計画・各学年内容一覧整理表（生活）に各学年の取り組みを入れる。
- ・学部としての共通教材「地域とつながる実践事例集」第1回目作成する。（1学期）
- ・学部としての共通教材「地域とつながる実践事例集」第2回目作成する。（2学期）
→各学年で作成した共通教材を学部で見合い、意見を出し合う。（1・2回目ともに）
- ・全体の振り返り。（今年度のまとめ。）
- ・次年度に向けて方向性の検討。

<p>単元名</p>	<p>「ローゼンで買い物をしよう」(ローゼンでの買い物)</p>	
<p>学年 (人数～子・教員含む)</p>	<p>小学部1年 児童 18 名・教員9名</p>	
<p>児童の実態</p>	<p>・歩行に関しては各クラスには実態差があるが、数回練習を重ね、短時間集団で歩けるようになってきた。・近隣校外時、車いす使用児童あり。</p>	
<p>行き先</p>	<p>「ローゼン」 </p>	<p>行き先の基本情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレあり。(店内) ・自販機あり。 ・お店が団地内にある為、周辺にベンチ等座って待てる場所もあり。
<p>地域とのつながりポイント (気がついた事など)</p>	<p>・ローゼンへの行く道には、自転車で走行している人や散歩をしている人など、人は多かったが、挨拶をすると返してくれる人も多かった。 ・ローゼンには、10時40分過ぎに着いたが、店内は人が少なく買い物はしやすかった。(レジもあまり混んでなかった) ・レジがセルフの場所もあり、児童が会計に時間がかかった時もお客さんは「ゆっくりで大丈夫だよ」と声をかけてくれた人もいた。</p> 	
<p>生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学部ステップ表の内容との関連性</p>	<p>【ステップ表】(生活より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・STEP1「集団のペースに合わせて歩くことができる」 ・STEP2「教員と一緒に金銭を用いた買い物の仕方を経験する」 ・STEP2「校外で簡単な交通ルールやマナーを守り集団で行動することができる」 <p>【学習指導要領】(目標・内容より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(コ)社会の仕組みと公共施設(1 段階) (イ)身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心を持つこと。 ・(ク)金銭も扱い (ア)身の回りの生活の中で、教師と一緒に金銭を扱おうとすること。 	
<p>小学部段階で 身につけさせたい力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・【7】移動「集団で移動できる。歩道を歩くことができる。」 ・【12】買い物・お金「コンビニなどに入って商品を購入することができる」 (教員と一緒に) 	

小学部 1 年 買い物学習 指導略案

担当者 秋葉・荒井・石渡

1. 日 時 令和 7 年 10 月 20 日（月） 10：10～11：20
2. 場 所 相鉄ローゼン 並木店
3. 参加者 児童 18 名
4. 指導者 担任 9 名
5. 単元（題材）「ジュースを選んで購入しよう」
6. ねらい
 - ・目的の商品を見つけ、レジで支払う経験をする。
 - ・交通ルールを守り、集団で歩く。
7. 展 開

時刻	児童の活動	教員の動きと個別の留意点
10:05	※クラスごとでの活動とする。 待機している間は、十分に休憩をとる	<ul style="list-style-type: none"> ・水分補給、休憩をとる ・トイレを済ましておく ・目的地や買うものを伝える。 （写真やイラストで示す）
10:10	<ul style="list-style-type: none"> ・始めの挨拶 ・活動内容の確認 買うものを知る ローゼンに行くことを知る 	
10:15	<ul style="list-style-type: none"> ・歩行体制の確認をする ・クラスごとに靴を履き替えて、学校 	<ul style="list-style-type: none"> ・交通ルールを守るよう、言葉をかける。場合によっては手をつなぎ一緒に歩く。 ・店舗入り口の前の縁石付近を掌握場所とする ・生徒の体調に十分に配慮し、休憩をとる。 ・安全に気を付けて歩行をする。
10:35	出発 <ul style="list-style-type: none"> ・ローゼン 到着 水分補給 ・商品を確認する ・何人かまとまって店舗に入り買い物を する 	
11:15	<ul style="list-style-type: none"> ・ローゼン 出発 	
11:20	<ul style="list-style-type: none"> ・学校 到着 靴を履き替え、教室へ ・まとめ（各クラス） ・終わりのあいさつ（各クラス） 	<ul style="list-style-type: none"> ・行った場所や、購入したものを発表する。 ・購入した品物は担任がまとめ、担当が保管する。

8. 準備するもの
救急バッグ（荒井）、商品をいれる袋（リュックの入れる）・おむつ等（必要に応じて）

児童：自分のリュック、財布、水筒

9. 評価
 - ・必要なものを買うことができたか。
 - ・目的の商品を見つけ、レジで支払うことができたか。
 - ・交通ルールを守り、集団で歩くことができたか。

<p>単元名</p>	<p>「機動隊にお手紙を渡しに行こう」</p>	
<p>学年 (人数～子・教員含む)</p>	<p>小学部2年 児童 15 名・教員6名</p>	
<p>児童の実態</p>	<p>・児童の実態に差はあるがゆっくり歩く児童に合わせて学年で20分程度歩くことができる。医療的ケア児1名。</p>	
<p>行き先</p>	<p>「第一機動隊」 </p>	<p>行き先の基本情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お願いすると訓練、車両の見学ができる。 ・広い待てるスペースあり。
<p>地域とのつながりポイント (気がついた事など)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・機動隊の方に挨拶ができ、児童のことを知ってもらえた。 ・学校の隣にあり、行きやすい。 ・事前にお願ひして訓練の様子を見学したり、車と写真を撮ったり、車に乗せてもらったりした。 ・隣同士にあるがお互いに知らないことが多いため、いい交流の機会になった。 	
<p>生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学部 ステップ表の内容との関連性</p>	<p>【ステップ表】 (生活より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・STEP1:「校外で簡単な交通ルールやマナーを守り集団で行動することができる。」 (日常生活の指導より) ・STEP1:「人と関わる経験を積む。」 <p>【学習指導要領】(目標・内容より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(オ)人との関わり(1段階) (イ)身の回りの人との関わり方に関心をもつこと。 ・(コ)社会の仕組みと公共施設(1段階) (イ)身近な社会の仕組みや公共施設の使い方などを知ること。 	
<p>小学部段階で 身につけさせたい力</p>	<p>【7】移動「列になって移動できる。歩道を歩くことができる。」</p> <p>【9】地域の人との関わり「地域の人と教員と一緒に短いコミュニケーションをとることができる。」</p>	

小 B2年 生活(近隣校外学習) 指導略案

担当者名:早川

1. 日時 令和7年11月21(金) 10:00~11:00 雨天中止
2. 場所 神奈川県警察機動隊
3. ねらい
 - ・地域の人と関わることができる。【暮】【働】
 - ・教員と手をつないで、集団で歩くことができる。【暮】【働】
 - ・地域とつながることができる。【暮】【働】

4. 展開

時 刻	児童の活動	教員の動きと個別の留意点
10:00	○昇降口集合 ○身支度の確認 ・教室で帽子をかぶってくる。 ・リュックと水筒の準備 ・昇降口で靴を履き替えてベンチ集合	・トイレを済ませておく。 ・救急バックを保健室から持ってくる。 ・医療的ケアグッズをもっていく。 ・看護師さんも、昇降口に集合していただく。健康チェック
10:05	○はじめのあいさつ ・目的地を聞く ・約束を聞く	・写真カードを見せ、注目を促す。
10:10	○学校出発 ・正門から出発し、集団で歩く。	・集団でまとまって歩けるようペースを調整する。 ・児童の安全に十分留意する。
10:20	○機動隊に到着 ・色紙をプレゼントする。 ・見学をする。 ・水分補給をする。	・各クラスでプレゼントを渡す人を決めておいてください。 ・怪我のないよう十分注意する。
10:50	○出発	
11:00	○昇降口着 ・集合、靴の履き替え ・終わりのあいさつをする。 ・教室に戻って水分補給をする。	・教室に戻ったら手洗いをする。

<p>単元名</p>	<p>「昆虫について知ろう(昆虫講座)」</p>	
<p>学年 (人数～子・教員含む)</p>	<p>小学部 3 年 児童 14 名・教員 6 名</p>	
<p>児童の実態</p>	<p>・児童の実態に差はある。友達と手をつないで歩ける児童もいる。校舎周りを歩いたり、近隣校外を積み重ねてペースを合わせて歩けるようになってきた。 医療的ケア児 1 名。発作対応が必要な児童 1 名。</p>	
<p>行き先 富岡総合公園 【今回は、雨天のため来校していただき、課外授業としてプレイルームで授業を行った。】</p>	<p>「富岡総合公園 管理センター」 </p>	<p>行き先の基本情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トイレあり。 ・室内。
<p>地域とのつながりポイント (気がついた事など)</p>	<p>「金沢支援学校 課外授業 昆虫について」 〈内容〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 昆虫の特徴 足が 6 本 2. クイズ 20 問(ハチの話とクイズ 3 問) 3. 標本を観察しよう 4. 生きている昆虫を観察しよう(カブトムシの幼虫・クワガタ) <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>〈気がついた事〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標本や昆虫などの教材に興味を持ち、また学校外の方の話を期待感を持って聞く様子が見られた。 ・蝶々の標本やカブトムシの幼虫、冬眠中のクワガタなど、自ら関心を持って、本物に直接触れることができ良かった。 ・クイズの問題が多く、長時間集中することが難しい児童が何人かいた。2 択のクイズだったが、今年度の児童には内容が難しくわかりにくい問題も多かった。事前に児童の実態などを打ち合わせしておいた方が良かった。 ・おおむねクイズの時間で、昆虫を観察する時間が短く感じたので、もう少し観察する時間が長い方がもっと関心をもてたと思う。 	

<p>生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学 部ステップ表の内容との関連性</p>	<p>【ステップ表】(生活より) ・STEP1:「校内で集団のペースに合わせて安全に歩くことができる。」 ・STEP2:「校外で簡単な交通ルールやマナーを守り集団で行動ができる。」</p> <p>【ステップ表】(道徳より) 生命の尊さ:「身の回りにいる虫や植物等に気付き関心をもつことができる。」</p> <p>【学習指導要領】(生活 目標・内容より) ・(イ)安全(1段階) (イ)安全に関わる初歩的な知識や技能を身に付けること。 ・(オ)人との関わり(1段階) (ア)教師や身の回りの人に気付き、教師と一緒に簡単な挨拶などをしようとするこ と。 ・(サ)生命・自然(1段階) (ア)身の回りにある生命や自然に気付き、それを教師と一緒にみんなに伝えようと すること。</p>
<p>小学部段階で 身につけさせたい力</p>	<p>【7】移動「集団で移動できる。目的の場所や活動に見通しを持って移動できる。」 【9】地域の人との関わり「教員と一緒に地域の人とあいさつができる。教員と一緒に 地域の人と関わったり、一緒に活動したりすることができる。」</p>

(近隣校外学習) 指導略案

担当者名 中本・眞崎

1. 日時 10月22日(水) 10:00~11:10
2. 場所 富岡総合公園 管理センター
3. 参加者 小B3年 14名
4. 指導者 小B3年担任、富岡総合公園管理センター職員
5. 単元 「昆虫講座」
6. ねらい
 - ・教員と手をつないで、集団で歩くことができる。
 - ・昆虫講座を通して、公園の方と交流を深める。
7. 展開

時刻	生徒の活動	教員の動きと個別の留意点
9:40	○昇降口集合 ・帽子をかぶる、リュックに水筒を入れる。 ・靴を履き替える。 ○はじめのあいさつ ・目的地、約束を聞く。	・トイレを済ませておく。 ★1組→抜去セット準備 2組→座薬準備
9:45	○学校出発 ・正門から出発し、整列して集団で歩く。 ・プラタナス広場付近の横断歩道を渡る。	・集団でまとまって歩けるようペースを調整する。
10:10	○富岡総合公園管理センター到着 ・係の人の指示に従う。	・児童の安全に留意する。
10:15	○昆虫講座 ・標本、生きている虫を見る。	・標本等壊さないように注意する。
11:00	○富岡総合公園出発	・集団でまとまって歩けるようペースを調整する。
11:20	○学校到着 ・おわりの挨拶をする。	・児童の安全に留意する。

8. 準備物

児童：水筒、帽子、リュック

教員：携帯電話2台、救急バッグ、座薬・座薬マニュアル(2組)、カメラ、抜去セット(1組)

9. 配慮事項

発作時の対応について

- ・発作時は発作マニュアルに従って対応する。
- ・発作が起きた時のことを想定し、外出時には必ず車椅子を持っていく。
- ・発作が起きた時は、養護教諭に連絡を入れる。

10. その他

- ・雨天の場合は、金沢支援学校にて課外授業を行う。

単元名	「アスレチック広場へ行こう」	
学年 (人数～子・教員含む)	小学部4年 児童 15 名・教員6名	
児童の実態	・歩行に関しては児童によって実態差がある。実態に応じてコースを分けて数回の歩行練習を重ねている。月に1回学年での歩行を行い、集団で歩けるようになってきた。・医療的ケア児 1 名。	
行き先	富岡総合公園 (アスレチック広場)	行き先の基本情報 ・トイレあり。 ・芝生あり。 ・東屋あり。
地域とのつながりポイント (気がついた事など)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人が挨拶をしてくれる。(散歩をしている人等) ・経路のほとんどの道が公園敷地内であり、自然が多く、車は少ない。 ・広場は十分な広さがある。東屋に荷物の置き場所や、休憩場所にできる。 ・道路までは距離があるが、柵等はないので飛び出し注意。 	
生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学 部ステップ表の内容との関連性	<p>【ステップ表】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・STEP2「簡単なルールやマナーを知り、交通機関や公共の施設等を安全に利用できる。」 STEP1「集団のペースに合わせて歩くことができる。」 <p>【学習指導要領】(目標・内容より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(工)遊び(1段階) (ア)身の回りの遊びに気づき、教師や友達と同じ場所で遊ぼうとすること。 ・(ケ)きまり(1段階) (ア)身の回りの簡単なきまりに従って教師と一緒に行動しようとする。 ・(コ)社会の仕組みと公共施設(1段階) (イ)身の回りの社会の仕組みや公共施設の使い方などについて関心を持つこと。 	
小学部段階で 身につけさせたい力	<ul style="list-style-type: none"> ・【9】地域とのかかわり①地域の人とあいさつができる。 ・【7】移動「集団で移動できる。15以上集団で歩いて移動できる。歩道を歩くことができる。」 	

小 B4年 生活(近隣校外学習) 指導略案

担当者名:肥田、白井

1. 日時 令和7年 10月 21日(火)13:15~14:10 雨天中止
2. 場所 富岡総合公園(アスレチック広場)
3. 単元(題材)「公園に行こう」
4. ねらい ・集団でペースを合わせて歩くことができる。【暮】【働】
・ルールを守り安全に校外を歩くことができる。【募】

7. 展開

時刻	児童の活動	教員の動きと個別の留意点
	トイレ等を済ませておく。	
13:15	昇降口へ移動 ・靴を履き替えた児童から支援スペースで待機	・バンダナを着用する。
13:20	○学校出発	・集団でまとまって歩けるようペースを調整する。 ・児童の安全に十分留意する。
13:35	○アスレチック広場到着 ・水分補給 ・遊ぶ	・荷物を一か所にまとめる。 ・安全に楽しめるよう遊具の使い方等に十分注意する ・児童が道路に飛び出したりしないよう十分に注意する。 ・天候や体制によっては活動時間を短くする。
13:50	○アスレチック広場出発 ・友達や先生と手をつないで一列に並んで歩く	・児童の安全に十分留意する。
14:05	○学校到着 ・活動や約束を振り返る ・終わりのあいさつをする ・手を洗う	・LTに注目できるように言葉かけなど行う。

8. 準備物

バンダナ、帽子、行き先写真カード、携帯電話、救急バッグ、カメラ、必要に応じてオムツセット、着替え

単元名	「並木地域ケアプラザ」～地域の人と交流しよう～	
学年 (人数～子・教員含む)	小学部5年 児童 13名・教員6名	
児童の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・歩行に関しては実態差があるが、20分程度は集団のペースに合わせて歩くことができるようになってきた。 ・並木ケアプラザでは利用者の方に対して歌を歌ったりダンスを踊ったりして自分たちなりの交流をすることができる。 	
行き先	「並木地域ケアプラザ」 	行き先の基本情報 <ul style="list-style-type: none"> ・トイレはあり。 ・待機する椅子が5個程度あり。 ・交流の部屋に行くのは階段を使用。
地域とのつながりポイント (気がついた事など)	<ul style="list-style-type: none"> ・並木地域ケアプラザまでの歩道で歩行者や自転車とすれ違う際に道を譲りあって挨拶をする。 ・並木地域ケアプラザの職員と利用者の方と挨拶をしたりお話をしたりして交流をする。 	
生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学部ステップ表の内容との関連性	<p>【ステップ表】(生活より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・STEP2「教員の支援の下、友達と一緒に遊具、玩具などに興味を持ち、一緒に活動することができる」 ・STEP3「公共交通機関や公共の施設でルールやマナーを守って安全に利用することができる」 <p>【学習指導要領】(目標・内容より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(オ)人との関わり(2段階) (ア)身近な人を知り、教師の援助を求めながら挨拶や話などをしようとするこ と。 ・(カ)役割(1段階) (ア)身の回りの集団に気付き、教師と一緒に参加しようとするこ と。 	
小学部段階で 身につけさせたい力	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との関わり:地域の人との関わり(教員と一緒に地域の人とあいさつができる) ・余暇時間の過ごし方:遊び(支援者と共に、固定施設や用意されたもので遊べる) 	

小B5年 生活指導略案

担当者名 小平田 吉田

1. 日 時 令和7年11月19日（水）
2. 場 所 並木ケアプラザの利用者さんと交流会1回目（全3回）
3. 参加者 児童13名
4. 指導者 担任 6名
5. 単元（題材）並木ケアプラザの方に自己紹介をしよう
6. ねらい
 - ・教員または友達と手を繋ぎ、集団で歩くことができる。
 - ・交通のルールを守って、歩くことができる。
 - ・地域の方と交流を深める。

7. 展 開

時刻	児童の活動	教員の動きと個別の留意点
10:25 10:30	・昇降口に集合 ・ケアプラザに向けて出発する。	・歩行体制を確認し、道路の飛び出しに注意をする。
10:40	・ケアプラザ到着。	・吉田 T が先方に挨拶をする。それまで児童と他の教員はその場で待機する。
10:45	・自己紹介を行う。 ・児童一人ずつネームプレートを見せながら自己紹介を行う。 1組→2組の順	・必要に応じて、児童の支援を行う。
10:50	・ケアプラザを出発する。	・道路の飛び出しに注意する。
11:00	・学校到着。 ・振り返り、次回予告を聞く。 ・終わりの挨拶をする。 全員で教室に戻る	○MT に注目するように促す。

8. 持ち物

- ・自己紹介のネームプレート、カメラ

単元名	「ハロウィンパーティーをしよう」～準備のための買い物～	
学年 (人数～子・教員含む)	小学部6年 児童 13 名・教員6名	
児童の実態	・児童1名、遅れてしまうことがあるが、概ねクラス、学年でまとまって 20 分程度は続けて歩くことができる。横断歩道では、児童数名、言葉かけを受けたり教員の手本を見たりして、手を挙げて渡ることができる。	
行き先	「南部市場」 	行き先の基本情報 ・トイレあり。 ・自販機あり ・休憩スペース(ベンチ、テーブル)あり。
地域とのつながりポイント (気がついた事など)	・平日昼間でも、一般のお客さんが多い。 ・事前に行くことを連絡しておく、市場の方は丁寧な対応をしてくださった。 ・トイレも数があり、待機できるようなスペースやベンチがあった。 ・児童に、バナナとマスカットをプレゼントしてくれた。 ・南部市場の方が、児童と手をつないで買い物をしてくれた。 ・後日、お礼の手紙を作成し、私に行く予定。 	
生活・近隣における 各学部段階(学習指導要領)や小学 部ステップ表の内容との関連性	【ステップ表】(生活より) ・STEP3:「自分で商品を選び、教員の支援を受けながら買い物をすることができる。」 ・STEP2:「校外で簡単な交通ルールやマナーを守り集団で行動することができる」 【学習指導要領】(目標・内容より) ・(ク)金銭の扱い (ア)身の回りの生活の中で、教師と一緒に金銭を扱おうとすること ・(コ)社会の仕組みと公共施設 (イ)身近な社会の仕組みや公共施設の使い方などを知ること。	
小学部段階で 身につけさせたい力	【12】買い物「レジ等でお金を出すことができる」 【9】「はじめてあった人とあいさつしたり、落ち着いて過ごしたりすることができる」 【7】「目的の場所や活動に見通しを持って移動ができる」	

小B6年 生活 指導略案

担当者名 原

1. 日時 令和7年 10月 21日(火) 10:10~11:20
2. 場所 南部市場
3. 単元 「ハロウィンパーティーをしよう」～準備のための買い物～
4. ねらい
 - ・買う目的と自分の買うものを理解し、買い物をすることができる。【暮】【働】
 - ・地域にある店で、店の人と交流することができる。【楽】【暮】
 - ・安全に校外を歩くことができる。【暮】

5. 展開

時 刻	児童の活動	教員の動きと個別の留意点
10:10	○支援スペースに集合する。 ・赤白帽子、バンダナをつける。 ・児童持ち物:リュックサック、水筒 ○はじめのあいさつ ・本時の活動内容を知る。 ・行き先や校外での約束を知る。	・教員持ち物:学年財布(7個)、商品の写真カード カメラ(各クラス1台)、救急バック、座薬 ・トイレを済ませておく。 ・MTに注目できるようにする。 ・ハロウィンパーティーで使用するものを買うことを確認する。
10:15	○学校出発 ・正門から出発し、集団で歩く。	・児童の安全に十分留意する。 ・集団でまとまって歩けるようペースを調整する。
10:30	○南部市場 食の専門店街 着 ・休憩所に荷物を置く。 ・事務局の方にあいさつをする。 ・見学のルールを確認する。 ◎先生と一緒に買い物をする ◎買わないものは触らない ・順番に買い物をする。	・休憩所は一般客も使うので、できるだけつめて座る。 ・事前に写真カードを見せて、買うものを確認する。 ・児童2人組で1商品を買う。 ・1人が商品を持ち、もう1人が支払いをする。 ・買うときには、店の人にあいさつをするよう促す。 ・買いに行く順番 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">八百屋</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">駄菓子屋</div> </div> <ol style="list-style-type: none"> <li style="width: 50%;">① チンゲンサイ【久保田】 <li style="width: 50%;">① ブラック…【佐藤・原】 <li style="width: 50%;">② ピーマン【久保田】 <li style="width: 50%;">② ボトルラムネ【原】 <li style="width: 50%;">③ オクラ【久保田】 <li style="width: 50%;">③ うまい棒【原】 <li style="width: 50%;">④ レンコン【久保田・原】
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 八百屋(あさいち) チンゲンサイ ピーマン オクラ レンコン </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 駄菓子屋<small style="font-size: small;">(南部新会田)</small> ブラックスンダー ボトルラムネ うまい棒 </div>	・買わない児童は、休憩所のベンチに座って待機する。【佐藤・遠藤・犬飼・白石】 ・店内が混雑している時は、一般客との接触に注意する。
	・順番を待っている間、必要に応じて水分補給をする。	

11:00	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレへ行く。 ・事務局の方にお礼を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も南部市場とつながりのある活動をしていきたいことを伝える。
11:05	<ul style="list-style-type: none"> ○南部市場 食の専門店街 発 ・学校に向かって歩く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出発前に人数確認をする。 ・児童の安全に十分留意する。
11:20	<ul style="list-style-type: none"> ○学校到着 ○おわりのあいさつ ・活動や約束を振り返る。 ・次回の活動の確認をする。 ○教室に帰る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・MTに注目できるようにする。 ・次回は、買った野菜で野菜スタンプを作ることを伝える。

5 考察とまとめ

今年度は、昨年度までの研究を活かし①・②（＊）の研究課題に取り組んできた。

- ① については、昨年度から使用している共通フォーマット（地域とつながる実践事例集）を活用しながら、Fig Jam も利用することで、児童・教員が使いやすく、分かりやすいものにすることを目指した。小学部は各クラスごとに電子黒板が配置されており、近隣校外等に行く際、事前学習で活用したり、他の学年がどこに行き、どんな活動をしたりしているか（地域とつながる実践事例集と授業案をセット）が分かるようにした。

Fig Jam については、紙媒体で作成するよりはいつでも見られるので勝手が良い。気軽にアクセスして確認できるので便利だと思う。という意見があった半面、活用しきれなかった。今後活用していきたい。という意見が多かったので、次年度に向けてどのように活用していくのか今後の課題にしたい。

- ② については、系統性のある授業づくりを目指した。日常生活でも活かせるような学習の取り組みをし、振り返ることで実践的な授業づくりをしていく一歩として、年間指導計画に「地域に関する項目」を位置づけることで、計画的に地域と関われるようにし、行く場所なども各学年の実態に応じて、地域の近隣歩行場所や地域訪問等を計画的に遂行できるようにした。

年間指導計画に位置付けてスタートしたことについては、計画的に実行できてよかった。予め計画していたため、異なる教科や単元と絡めて取り組むことができた。等活用することができたという学年が多かった。

また、系統性のある授業づくり（実践事例集と関連性について）については、目標が明確化されてよかった。セットで考えることで児童に身につけさせたい力も明確になると思った。他学年の授業でもベースができていたのでアレンジしやすい。活用することで小学部の身につけさせたい力を確認し、反映することができた。等共通フォーマットと授業案をセットで考えることで、関連づける作業がスムーズになった。という意見が多かった。

この研究を通して、地域のクリーン活動に参加する。特別支援学校には、こんな子が通っているんだな等地域の方に認知してもらう為に、外出時には積極的に挨拶をすることが継続していく必要があると感じた。今後も地域とのつながりを持っていけたら良いと思う。近隣を積極的に使用する。等の意見が多くあり、地域とつながる大切さや意識を小学部として再確認することができた。

また、今年度は昨年度よりも多くの場所に出かけることができたり、外部からの読み聞かせのボランティアさんにも来ていただいたりする事ができ、小学部として新たなチャレンジをすることもできた。次年度も継続していきたい。

今後も、地域にとって必要とされる学校であることが、地域とのつながりと共に歩む学校であると考え、次年度に向けては、今まで継続してきたことを活かしつつ、学校と地域とが相互に関わりを深めるにはどうしたらいいのかを考えながら、地域とつながっていきたい。

中学部B（知的障害教育）部門

1 中学部B部門サブテーマ

「地域の人材を活用した授業づくりに向けて」

昨年度の研究では、地域資源を「場所」と「人」に分けて整理し、場所については Fig Jam を用いたマップに情報を落とし込み、教員が誰でも利用できる形でまとめてきた。

今年度は、もう一つの人的資源リストを活用した授業の実践を試みた。実践にあたり、事前に中学部教員を対象としたアンケートを実施した。その結果を資料①に示す。アンケートでは、地域の人材を活用した授業に対して教職員の関心が高いことが分かった。全員が「実施したい」と回答しており、生徒にとって新しい学びが得られることや、教員自身にとっても刺激になることを期待している様子が見えがえた。

一方で、実際に進めるうえでは「どこに依頼すればよいかわからない」「生徒の実態に合った授業をしてもらえるか不安」といった声が多く、方法や手続きが見えにくいことが課題であることも分かった。

本校では、これまでも外部講師を招いた授業が行われてきたが、学校として講師リストや授業記録が校内で共有できる形で残っていないため、継続的な活用につながらないことが少なくなかった。その背景として、

- ① 個人のつながりで依頼しているため、担当者が変わると継続しにくいこと
- ② 授業内容や配慮点の情報が残らず、他の教員が依頼をためらってしまうことが考えられる。

こうした課題を踏まえ、講師情報を共有できる仕組みや、授業内容を記録して次につなげる工夫が必要ではないかと考え、今年度の研究に取り組んだ。

今年度の研究を進めるにあたり、中学部では新たな試みとして「街の先生」制度を活用した。

「街の先生」とは、横浜市の各自治体が運営する制度であり、地域のさまざまな経験や特技を持つ方を登録した人材バンクである。これまでのように個人のつながりに依存するのではなく、特別なつながりなくても依頼できる仕組みとすることで、継続的な活用につながるのではないかと考えた。街の先生については資料②に示す。

2 目的

- ・地域の人材を活用した授業実践を継続的に行うための方法を探る
- ・実践内容をデータとして蓄積し、教員間で共有する

3 方法

- ・教員アンケートで課題を整理し、地域の人材を活用した授業実践を行った。
- ・得られた内容を記録・蓄積し、教員間で共有可能な形式でまとめた。

4 経過

- ① 年度初めに学部の教員を対象にアンケートを実施し、地域の人材を活用した授業に対する意識調査を行った。アンケート結果や意見を踏まえ、研究チームで計画を立てた。
- ② 各学年で、出前授業として実施したい内容について検討し、依頼する外部講師を決定した。1年生は「麵打ち」、2・3年生は「大道芸」の講師を依頼することとした。
- ③ 外部講師の依頼にあたっては、「街の先生」制度を活用し、依頼方法や手続きについて確認を行った。
- ④ 各学年の授業担当者が講師と事前の打ち合わせを行った。いずれの講師も事前来校を希望し、

授業内容や進め方、生徒への配慮点について話し合った。

- ⑤ 出前授業を実施した。(資料③) 授業後には、生徒の様子や進め方について振り返りを行い、学部内で共有した。
- ⑥ 外部講師による授業の実績をデータとして残すことを目的に、「外部講師活用シート」を作成し、記録項目について検討した。
- ⑦ 令和6年度および令和7年度の外部講師活用の実績を、作成したシートにまとめた。(資料④)
- ⑧ 外部講師による授業を実施してみてもの振り返りや、今後の教育課程への位置づけについてアンケートを実施し、学部内で意見交換を行った。(資料⑤)

5 考察とまとめ

本研究では、「地域の人材を活用した授業づくりに向けて」をサブテーマとし、授業実践を行うとともに、その実践をどのように学校内で共有し、次年度以降につなげていくかという点に焦点を当てて取り組んだ。

実施した出前授業について、授業後に行った振り返りアンケート(資料⑤)では、「生徒の興味関心が高く、意欲的に参加していた」「普段できない体験ができ、生徒が喜んでいて」「学んだ内容を、その後の学校生活の中で行っている様子が見られた」といった肯定的な意見が見られた。

これらのことから、地域の人材を活用した出前授業は、生徒にとって新しい経験や学びにつながる面があることがうかがえた。

一方で、同じアンケートの中では、「単発での実施では、かえって教員の負担が増える可能性がある」「事前の準備や打ち合わせを、より丁寧に行う必要がある」「打ち合わせの時間を確保することが難しい」「年度当初から実施が決まっている方が計画しやすい」といった課題も多く挙げられた。

特に、特別支援学校での出前授業が初めてとなる講師の場合、生徒の実態を十分に共有できていないと、授業内容の調整や支援に教員が多く関わる必要が生じ、結果として教員の負担が大きくなることが分かってきた。

今回の研究では、外部講師活用シートを作成し、授業の実践を記録として残すことに取り組んだ。講師の依頼方法や事前打ち合わせの内容、授業時の様子、生徒への配慮点や反省点などを整理して記録することで、次年度以降に外部講師を依頼する際の見通しを持ちやすくなり、教員の負担軽減につながるのではないかと考えられる。

また、担当者が変わった場合でも、過去の実践を参考にしながら検討することができるため、外部講師活用が特定の教員に依存しにくくなる点も、メリットの一つであるといえる。

本校では、他学部においても外部講師を活用した事例が複数見られることから、今後は、学部を超えて実践のデータを共有できる形があると、学校全体としての活用につながっていくのではないかと考えられる。

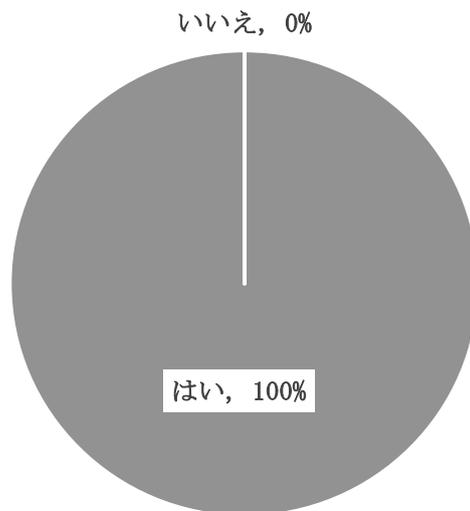
次年度に向けた話し合いの中では、今後の継続的な活用に向けて、「時期」や「依頼団体」をある程度固定していくことが必要ではないか、という意見が多く挙げられた。

時期や依頼先を固定することで、教育課程への位置づけが検討しやすくなることに加え、授業の見通しを持って準備を進めることができ、結果として担当教員の負担軽減にもつながることが期待される。

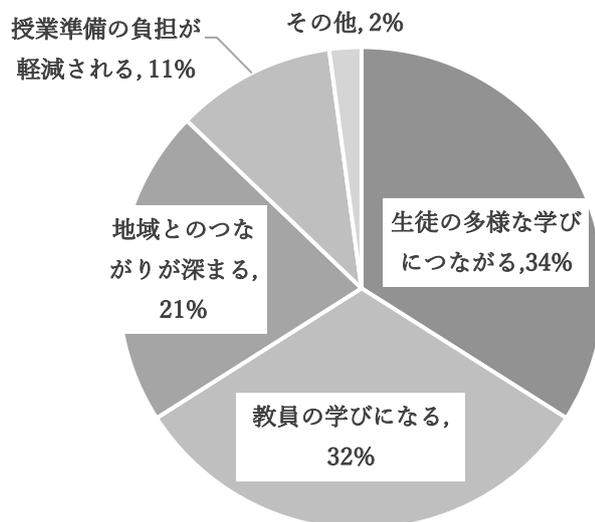
今後も、中学部の教育課程に適した形での地域人材活用について、実践の記録と振り返りを重ねながら、実績と共有できるデータを積み重ね、引き続き検討を進めていきたい。

①地域の人材による出前授業を実施したいと思いますか？

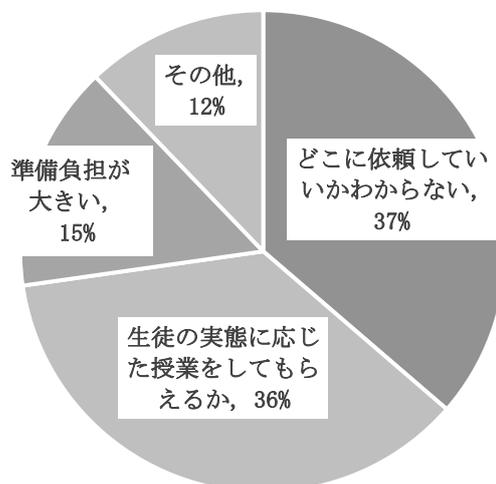
資料①



②実施したいと思う理由を教えてください



③地域の人材を活用する際、課題に感じることはありますか？



(回答数 20)

1. 金沢区『街の先生』一覧表(一部。氏名は省略)

金沢区「街の先生」一覧表

地域のイベント等
でご活用ください



「街の先生」とは

生活経験・職業経験が豊かで、様々な特技や技能をお持ちの方にご登録いただき、地域の皆様に紹介することにより、自発的な生涯学習・市民活動を支援する制度です。「町内会や子ども会のイベントで頼みたい」「サークルの講師を探している」等いろいろな場面でご活用ください

分野	カテゴリー	氏名	コメント・プログラム等	対象
音楽	ギター		ギター独奏やアンサンブルを一緒に楽しみましょう。演奏依頼もお気軽にご相談下さい。	小・中・高校生、 一般、高齢者
	ギター・ 歌・和太鼓		金沢区を中心に音楽活動をしています。演奏依頼や指導依頼など、お待ちしております。	未就学児、 小・中・高校生、 一般、高齢者、その他(障害者の有無も問いません)
	クラリネット・ サクソ		有名なヒット曲、懐かしの名曲をサクソ等で奏でます。癒しのひとときをお届けします。	一般、高齢者
	鍵盤ハー モニカで 健康づくり		科学的に実証された健康への効果！声・喉・脳に良い楽器で楽しもう(65歳以上対象)。体験用の楽器も数台あり。	高齢者
	箏・三絃		和の音楽を聴くことや弾くことで和やかな気持ちになれることを願っています。年齢制限無です。訪問演奏プログラムは30分～1時間。	未就学児、 小・中・高校生、 一般、高齢者
	三味線・ 端唄		演奏と指導。「梅は咲いたか」「奴さん」などの端唄を弾きます。粋で風雅な唄と三味線を楽しみましょう。	中・高校生、 一般、高齢者
	声楽・ ボイスト レーニング		歌を通じて心身もスッキリする発声法を指導します。歌で自分を表現してみませんか？声楽演奏は最大60分程度。	中・高校生、 一般、高齢者
	大正琴		一緒に練習しながら、弾けるように家でも練習して出来ると楽しいので努力しましょう、と指導しています。	一般、高齢者
	チェロ		演奏と指導。チェロは正面を向いて弾くので始めやすく豊かな響きが魅力です。丁寧に指導します。	未就学児、 小・中・高校生、 一般、高齢者
	二胡		中国民族楽器の美しい音色を感じながらいろいろなジャンルの曲を楽しく演奏しましょう。	一般、高齢者

2. 依頼の流れ

- ① 一覧表から希望する講師を選ぶ
- ② 金沢区地域振興課へ「紹介依頼申請書」を送付(メールまたはFAX)
- ③ 後日、地域振興課より返答(講師の承諾・不承諾を含む)
- ④ 講師と事前打ち合わせ(授業内容、費用、配慮事項など)
- ⑤ 出前授業の実施

参考 URL : 横浜市金沢区ホームページ『街の先生』の紹介について

https://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/kurashi/kyodo_manabi/kyodo_shien/center/machinosensei/2-2.html

麺打ち体験

まずは手でしっかりこねます！



講師の方が持参してくれた
パスタマシーンを使いました

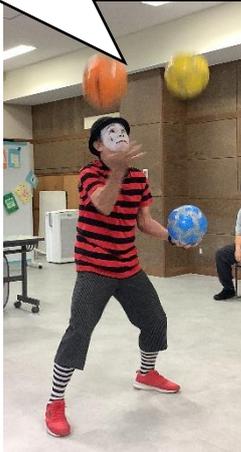


足で踏んでコシのある麺を作ります



自分で打ったラーメンは最高♪

最初に先生の演技を鑑賞



大道芸体験



作ったバルーンを的に向かって飛ばします

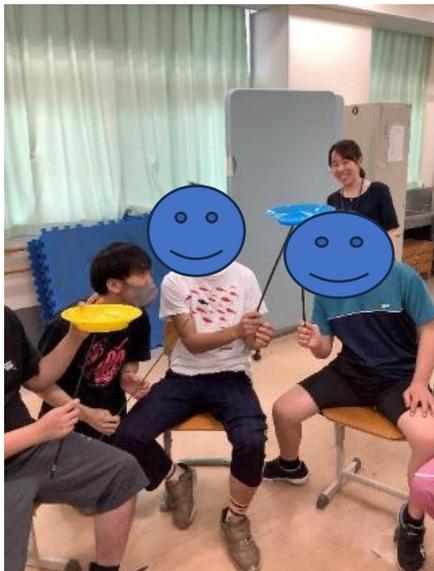


空の袋を重そうに持ちあげる
パントマイムに挑戦！

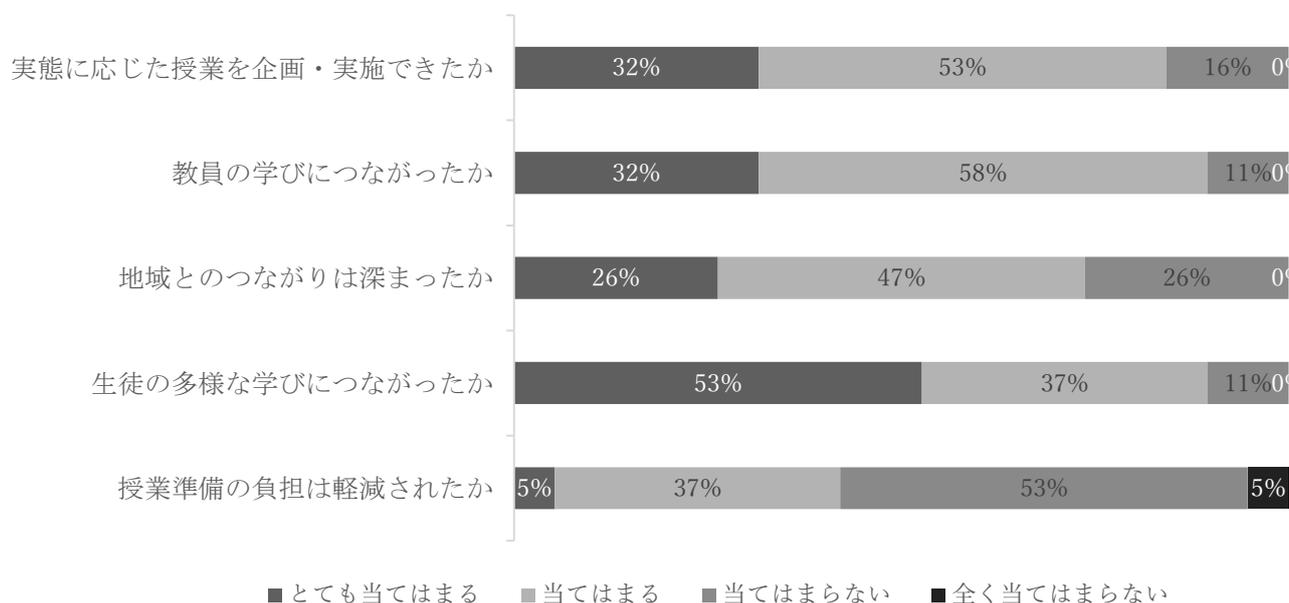
外部人材活用シート【書式】

講師 情報	講師名			
	連絡先			
	依頼方法	外部団体()街の先生(区)・知人()・その他		
	対面打合せ	有【学校・その他の場所()】・ 無		
	費用	交通費	円(駐車場利用有)	材料費 円 その他 円
授業 情報	教科		題材	
	参加学年	年 名		
	指導致案	ⅢⅣ>06 その他>05 指導致案・指導致略案>R 年度>		
	様子	(様子を簡潔に記述。写真などの貼り付けも可)		
次回に向けて				

外部人材活用シート【記入例】

講師 情報	講師名	大道芸ボランティアぼたん座		
	連絡先	〇〇〇-〇〇〇〇-〇〇〇〇		
	依頼方法	外部団体() <u>街の先生(金沢区)</u> ・知人()・その他		
	対面打合せ	有【 <u>学校</u> ・その他の場所()】・無		
	費用	交通費0円(<u>駐車場利用</u>) 材料費0円 その他0円		
授業 情報	教科	総合	題材	大道芸を体験しよう
	参加学年	中B3年 18名		
	指導案	ⅢⅣ>06 その他>05 指導案・指導略案>R07 年度>05 中B>3年>総合		
	様子			
次回に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・来校による事前打合せが1時間ほど。その他の連絡はメール。 ・場所は自立活動で適。会場準備のため、30分ほど前に来校。その間も会場を抑えておく必要がある。 ・バルーンを行う場合は、ゴムアレルギーの生徒がいないか要確認。 ・はじめに講師の演技鑑賞10分ほど。生徒は注目して見ていた。 ・体験内容は、皿回し、パントマイム、バルーンアート。3グループにわかれ、5分ずつ行った。グループ分けは担任が事前に行った。 ・皿回しは内容がわかりやすく、比較的重度の生徒も行うことができた。 ・パントマイムは物を介さないなので、体験は少し難しかった。 ・ぼたん座に在籍する、本校卒業生も参加し、手品を披露してくれた。 ・いろいろなキャラクターのバルーンアートをプレゼントしてくれた。 			

出前授業実施後の振り返りアンケート



その他、実施後の感想や意見、改善点など（自由記述、抜粋）

【肯定的な意見】

- ・地域のゲストティーチャーを探す方法や、地域に〇〇を得意とする人がいることなどを知る良い機会となった。今後探したい場合は役に立つと思う。
 - ・ゲストティーチャーを1から探すのは大変なので、『街の先生』のような候補があるとよい。
- ・大道芸の授業後、生徒たちが学校で学んだ内容で青んでいる様子もあり、教育的効果はあったと感じた。
- ・普段できないことを経験して、生徒が喜んでいてよかった。
- ・生徒の興味関心が高い題材だったので、意欲的に参加できた。調理は、ゴールがわかりやすく、生徒にとって良かった。

【課題として挙げられた意見】

- ・単発になってしまうと教員の負担がかえって増える可能性がある。
- ・調理ということもあり、もっと準備や打ち合わせをしておくべきだった。外部講師を依頼する際は、綿密な計画、打ち合わせが必要だと学んだ。
- ・打ち合わせの時間を作るのが大変だった。枠組みを作って計画できるとよい。
- ・講師の方に事前に生徒の実態を見てもらえるとよかった。
 - ・年度開始時点で実施することが決まっている方がよい。その場合、1年生は実態がわからないか。

高等部B（知的障害）教育部門

1 高等部サブテーマ

「地域との連携・協働を目指した授業を考える。」

このサブテーマの研究は2年目を迎える。これまでの経緯として、本校では令和6年度からの4年間の学校目標として「一人一人の教育的ニーズを受けとめ、地域との協働を通して自立と社会参加の基礎となる生きる力を育む」ということを挙げている。ここ数年、新型コロナウイルス感染症対策の緩和に伴って、学習活動も以前のような活動内容を取り戻しつつある。その過程の中で、高等部として、生徒それぞれが生きる力を培っていく上で改めて地域での活動の必要性と、生徒一人ひとりの生活や持てる力をより豊かなものにしていく必要性が感じられる。高等部3年間という限られた時間の中で、それぞれの生徒の生きる力を育むこと、その力をさらに培っていくにはどのように活動を重ねていけばよいかを考えながら、新しい年度に代わり、各学年で活動内容の整理や実践を積み重ねてきた。地域の資源を活用することで、生徒たちの将来的な自立と社会参加へとつなげていきたいと実践してきたこれまでの内容を2年間のまとめとして報告する。

2 目的

- ・身近にある社会資源を知り、その活用や経験をするためにはどのような活動や授業が必要であるか考える。
- ・地域との協働活動を通して地域の人々に本校の生徒の存在を知ってもらう。

3 研究の方法

- (1) 1年目で出た課題の洗い出し、改善を行う。
- (2) 地域に出ていく活動を実践する。(研究として取り組む授業を決めていく)
- (3) 研究発表会を行う。助言を受け、本研究のまとめを行い、最終報告冊子を作成する。

4 研究の経過

各学年で地域の社会資源を活用した授業を組み立て実践する。その取り組み内容をまとめ、共有しあう。それぞれの学年の生徒の実態に即して活動内容に系統性を持たせる。

(1) 背景

本校は、金沢の臨海部である鳥浜工業団地、金沢産業団地を有する卸売業、製造業を中心とする中小企業が集まる産業団地地区にある。近くには臨海部をつなぐ公共交通機関「シーサイドライン」が走り、生徒も通学として利用している。また、富岡総合公園に隣接し、富岡八幡神社なども近隣にあり、自然や歴史に触れられる、社会資源豊富で豊かな立地にあるといえる。このため、小中高、学部を問わず近隣との関係を結んできた経緯がある。

高等部についてはコロナ禍以前から近隣の大学、老人福祉施設、事業所等に協力してもらい、校外学習などを実施してきた。また「職業」の授業では、地域の菓子店や楽器店に協力してもらい定期的に受注作業を請け負っている。実際の製品を扱う緊張感は、卒業後社会人として働いていくことへのイメージを高め、意識やモチベーションの維持に役立っている。「職業」以外の授業では「社会生活」や「総合学習」の中で校外学習という形で地域へ見学に行き、近隣を知る、という活動を行ってきている。

(2) 動機・意義

こうした学校の立地や学部の今までの取り組みの蓄積を背景に、改めて地域に出て教育活動することへの意識を高めたい。地域の中で生きていくことになる生徒たちが、地域への愛情を持ち、新しいつながりの中でコミュニケーション力や学力を養う。地域側も活動により地域の活性化を

目指す。社会の入り口に差し掛かっている学部として意義のある学習活動としていきたい。

(3) 今年度の研究

今年度の高等部は1年生 35名、2年生 30名、3年生 28名であり、1年生は4クラス編成、2、3年生は3クラス編成となっている。本校中学部からの生徒と近隣中学校からの生徒で構成されている。学年の中でも生徒の実態には幅があり、また、各学年の生徒の実態もかなり異なる。

今年度は昨年度での方向性の確認から、各学年毎に研究を進めていくことになっていた。

1年生は、高等部での活動で身近な社会資源である南部市場を題材に研究を重ねてきた。2年生は「職業」「校内実習」などの作業学習での地域資源との関わりをテーマに行ってきた。3年生は毎年3年生で行っている老人保健施設「富岡はまかぜ」での活動を題材に研究に取り組んできた。

各学年の取り組みを報告する。

(4) 高B1年生の取り組み

○「南部市場を題材とした授業について」	
昨年度の研究の資料により、高等部の各学年で共通して1年次に行っている学習に「南部市場」を題材とした授業があることがわかった。	
年度(学年)	ねらいと授業内容
令和5年度 (現3年生)	「学校周辺の地域を知る」をねらいとして、グループに分かれ県産品を見つけて模造紙にまとめた。
令和6年度 (現2年生)	「働くこと」に重点を置き、ポスター作りに向けた見学や交通ルールや公共のマナーをまもって集団で歩行できることをねらいとして、グループに分かれテーマ別に調べ学習を行い、掲示物を作成して発表した。
上記を踏まえて、今年度も南部市場を題材とした授業を1年次に継続して行うこととした。	

○単元名「南部市場を調べてみよう」

○ねらい ①身近にある地域の調べ学習を通して、地域の魅力を知り、興味関心を広げる。

②本校の「身につけたい力の内容表」の「地域との関わり」にある内容を学習する。

身につけたい力			内容C
暮らす力・働く力・楽しむ力	自立活動・人間関係の形成	他	地域との関わり
			<input type="checkbox"/> 地域の公園、施設を知る
			<input type="checkbox"/> 地域の公園、施設利用の経験をする
			<input type="checkbox"/> 地域の人とあいさつができる
			<input type="checkbox"/> 地域の人からの働きかけを受けて行動することができる
<input type="checkbox"/> 地域の施設や店舗でのやり取りを経験する			
<input type="checkbox"/> 初めて会った人とも話ができる			
<input type="checkbox"/> 地域の施設や店舗でのやり取りで支援者と必要に応じて発信することができる			
<input type="checkbox"/> 地域の施設や店舗でのやり取りで自ら発信することができる			
<input type="checkbox"/> 自己紹介ができる			

※「身につけたい力の内容表」から一部抜粋

○指導内容

- ・2グループに分かれて学習

調べ学習グループ (①マップ作り)	イラストグループ (②マスコットづくり) (③南部市場百景)
○お店調べ お店の地図を作る 地図に紹介文を入れる お店にインタビューをする インタビューしたことを文章にまとめる	○キャラクターづくり キャラクターを考える イラストを描く (ポスター作製) ○南部市場のお店などを撮影 写真を南部市場百景としてまとめる

○学習計画

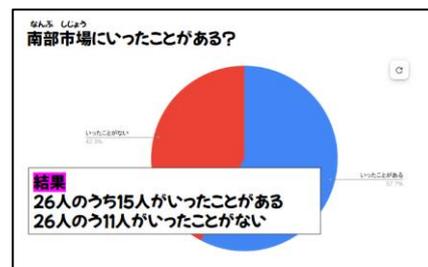
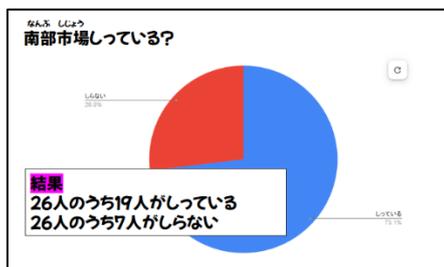
授業	日程	活動内容	学習単位	概要
社会生活	10/28(火)	南部市場について ・南部市場の説明 ・キャラクターについて	全体	・南部市場への印象 (アンケート) ・キャラクター作りの基礎を全体で決める
総合学習	10/29(水)	・マップ作り ・キャラクターづくり	グループ別	・店舗の地図作り、紹介文 PC 入力 ・キャラクター作り (ポスター)
社会生活	10/31(金)	・マップ作り ・キャラクターづくり	グループ別	・店舗の地図作り、紹介文 PC 入力 ・キャラクター作り (ポスター)
社会生活	11/4(火)	AM: 近隣校外学習 (インタビュー/撮影)	全体	・営業中の全店舗にインタビュー ・風景など写真撮影 (南部市場百景)
LHR	11/5(水)	発表資料まとめ	グループ別	・インタビューしたことをまとめる ・キャラクター作り (ポスター)
社会生活	11/7(金)	発表資料まとめ、発表練習	グループ別	・インタビューしたことをまとめる ・写真を南部市場百景としてまとめる
総合学習	11/7(金)	2階プレイホール: 発表	全体	・南部市場への印象アンケート、感想 ・各店舗のおすすめや情報を発表する ・ポスターを発表する

○「地域との関り」のねらいと生徒の様子との関連

ねらい（地域との関わり）	生徒の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の公園、施設を知る ・地域の公園、施設利用の経験をする ・地域の人とあいさつができる ・地域の人からの働きかけを受けて行動することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習や実際に訪問したことで、南部市場を知ることができた。 ・南部市場に行って、マナーを守りながらお店を見て回り雰囲気を経験することができた。 ・お店の人に、「こんにちは」の教員の手本を見てあいさつできる生徒が多くみられた。 ・お店の人に「おすすめの商品はこちらです」と誘導されると、生徒たちは商品に近づいて確認することができていた。
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の施設や店舗でのやり取りを経験する ・初めて会った人とも話ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お店の人に対して、あいさつをして、金沢支援学校の生徒であることを伝え、インタビューの承諾を得てから、「おすすめの商品は何ですか」と質問する流れで取り組んだ。 ・調べ学習グループの生徒全員が、少ない支援を受けながらお店の人にインタビューすることができた。
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の施設や店舗でのやり取りで支援者と必要に応じて発信することができる ・地域の施設や店舗でのやり取りで自ら発信することができる ・自己紹介ができる 	

○生徒の変容

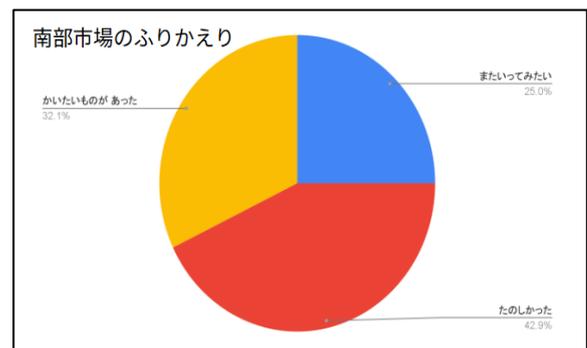
最初の授業で生徒にアンケートを取ったところ、南部市場を知っている生徒が多かったが、一方で「行ったことがある」かの回答では、4割以上の生徒が行ったことが無いと回答していた。



最後の授業で生徒にアンケートを取ったところ、南部市場に出かけて「楽しかった」という回答が一番多かった。近隣校外学習（外出、散策）そのものが楽しかった生徒も一定数いると思われるが、それでも南部市場への近隣校外学習に好印象をもった生徒が多いことを示している。

「買いたいものがあつた」という店舗に対して具体的に興味関心をもった生徒も一定数以上いたこともわかる。

生徒の感想では、「(初めて)インタビューをしたことが楽しかった」と述べる生徒が数名おり、中には、高等部入学時から全体授業では積極的に話す印象がない生徒も含まれていたことから、生徒の変容を感じるとともに、学校教育の中で地域の人との関わりを作ることの有益さを改めて気づかされた。



○連携・協働先の変容

変容についてはこれまで関わりのある相手方のため、今年度のみで考えるのは難しいが、この度は、訪問時に事務局の方とのあいさつや御礼の時間を設定したり、訪問後に、作製したマップやキャラクターポスターなどを休憩室に掲示していただいたりすることができた。



○まとめ

成果としては、本単元のねらいの以下の二点である。

- ① 生徒たちは、南部市場の調べ学習を通して、地域の魅力を知り興味関心を広げることができた。
- ② 本校の「身につけたい力の内容表」の「地域との関わり」に記載されている内容を学習することができた。

調べ学習については、校外学習（水再生センター）や総合（金沢区の特産品）でのマップやポスター作り、PCを活用した情報収集、学年全員の前で発表することなどの学びの経験があった。本単元の直前の校内実習においては、あいさつや言葉遣いなどを重点的に練習していた。このような学習の積み重ねが、生徒たちが自信を持って調べ学習に取り組み、南部市場の店舗でのやり取りに積極的に取り組めた大きな要因であると考えられる。

今後も、金沢区以外から高等部に入学してくる生徒は多いと思われるので、高B1年生での学習として、本校の最も身近な商業施設の活用と連携を継続していくことが望ましい。

（5）高B2年生の取組み

テーマ「地域とともにある学校を目指して～地域の資源を活用した授業づくり～」

高等部サブテーマ「地域との連携・協働を目指した授業を考える」

学年のサブテーマ「彩り・・・回りまわって地域貢献」

○授業名

「職業」「校内実習」

○ねらい

地域資源を活用し、地域の人たちと関わり、活動することで生徒の作業能力の向上や意欲を高めるとともに「人の役に立つ」「人から喜んでもらえた」等の経験を積み重ね自信や自己有用感を育み、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れるようになる。

○内容

- ・地域事業所「くるり工房」からの依頼で、廃材を利用したアクセサリーで使用するコードの解体やパソコンキーボードの解体等。
- ・地域活動センター「野島青少年研修センター」の体験プログラム「ビーチグラスづくり」のビーチグラスの仕分けやペンダントチャームの仕分け等。

○生徒の様子と変容

前期の校内実習では、地域活動センター「野島青少年センター」と地域事業所「くるり工房」から依頼を受けて、様々な作業に取り組んだ。

「野島青少年センター」の作業は、体験プログラムであるアクセサリーや小物入れの材料の準

備を行った。アクセサリ―の材料になるリングの色分けや小物入れに使用するビーチグラスの色分けや計量の作業は、様々な実態の生徒に対応できるうえに見通しが持ちやすく、校内実習の作業として適していたと思われる。

「くり工房」の作業はパソコンキーボードやコードの解体を行った。最初は、工具の扱いに戸惑う生徒の様子も見られたが、説明を聞いたり手本を見たりして徐々に自分の力でできるようになった。完成品を見せることによって見通しを持って取り組むこともできた。「野島青少年センター」の作業同様に様々な作業工程があるため、生徒の実態に応じて異なる作業に取り組むことができた。

このように、前期の実習において相応の成果が見られたため、後期は先方に生徒の実態を伝えたいと、より適した作業を提供していただくことになった。

また、受注品の受け取りや納品を生徒と一緒にやることにした。直に依頼させることにより責任感が生まれ、より丁寧に作業をしようという責任感に繋がり、直にお礼を伝えられることで達成感や自己有用感を感じることができたと思われる。

○連携・協働先の変容

事業所と直接かかわる前は、生徒の作業精度やペースが事業所の求める水準に達するのは難しいのではないかと不安があった。また、どの程度まで業務を依頼してよいのか判断がつかず、当初は慎重な姿勢で関わっていた。さらに、作業内容も限定的であり、生徒が対応できる範囲は限られているのではないかと先入観を持っていた。

しかし、実際に事業所との協働を進める中で、これらの認識に変化が見られた。生徒が担当した作業物は細部まで丁寧に整えられており、事業所側からも高い評価を得るなど、その精度の高さに驚かされた。また、多岐にわたることを実感し、生徒の力を生かした活動内容の拡充の可能性を感じることができた。さらに、作業の進行のペースも想定より速く、効率的に作業を進める力があることを改めて認識した。

当初はどこまで依頼してよいのか迷いがあったが、事業所との関係性を深める中で、徐々に依頼内容を柔軟に調整・拡大できるようになった。このようなやり取りを重ねる中で、信頼関係が構築され、協働体制がより安定したものとなった。事業所からは「夜勤のアルバイトの学生と同程度のクオリティで驚いた」との声もあり、生徒の実践的な力が外部でも十分に通用することを確認する機会となった。

このように、事業所等との連携・協働を通して、教員や事業所双方の生徒に対する見方や期待に変化が生じ、今後の地域協働の在り方を考える上で大きな気づきが得られた。

・まとめ、今後の課題

本実践では、地域の資源を活用し、「地域協働」「地域貢献」を意図して取り組みを進めた。一方で生徒の作業能力の向上や働く意欲の育成もねらいとして位置付けた。その結果、両者のねらいを同時に達成することができたと考える。生徒一人ひとりの実態を把握した上で、作業の難易度やスピードを段階的に高めていくことで、生徒の日々の活動の中で驚くほどの成長を見せた。

同じ作業であっても、その目的や社会的意義を理解して取り組むことによって、生徒の姿勢や意欲に大きな違いが生まれる。したがって、事業所等から依頼された作業の背景や目的について、担当教員が丁寧に生徒に伝え、理解を深めていくことが重要であると実感した。作業が「与えられたもの」だから行うのではなく、「地域にどう貢献できるか」という視点を共有しながら進めることで、学びの質が高まるといえる。

今後も「地域とともにある学校」「地域に愛される学校」を目指し、地域との連携・協働を継続的に推進していきたい。本実践を通して得られた学びをもとに、授業実践をさらに積み重ね、地域と学校が互いに支え合いながら成長していく関係を築いていくことが今後の課題である。

(6) 高等部3年生の取り組み

- 単元名： 「はまかぜ」での活動（職業）
- ねらい：
 - ・外部施設での活動を通して、働く意欲や意識を高める。
 - ・挨拶や報告など、働く姿勢やマナー、ルールを身に付ける。
 - ・自分の役割を意識して責任を持って活動する。
- 作業内容： タオル・エプロンたたみ等
- *マスク等で衛生管理ができる生徒が参加する。

○「はまかぜ」での活動に至るまでの経緯

特別養護老人ホーム「富岡はまかぜ」は金沢支援学校より徒歩10分程の場所にある。10年以上前からの関わりとのことで、初めのきっかけを知る教員は皆無になってしまった。コロナ禍での活動休止を経て、令和6年度の3年生から活動が再開された。活動については、老人福祉施設という場所への配慮もあり、参加生徒は5～6名の少数、マスクでの衛生管理のできる者とした。

○今年度の取り組み（「はまかぜ」での活動）

- ・参加者： 生徒6名、引率教員2名
- ・期日： 火曜日（職業）10:30～11:30
- ・作業内容： タオル、エプロンたたみ
- ・時程

9:30 3-3 教室集合 体調確認、検温（参加者全員行う。提出用紙に記入）たたみ方の復習

10:30 「はまかぜ」到着

10:40 作業体験開始

11:20 作業終了

11:30 「はまかぜ」出発

11:40 学校到着 支援スペースにて振り返り

○指導について

生徒に伝えている目標は、①（場所や仕事内容を）知る、挨拶をする。②やり方を覚える、自ら挨拶をする。③丁寧に行く。④丁寧かつ、速さも意識して行う。これらを回を追うごとに伝えていった。きちんと丁寧に行くことが大前提であるが、仕事である以上時間内に終えること、その両立の大切さも学んで欲しかった。

学校では緊張感があまりない状況であるが、「はまかぜ」に行くとき程よい緊張感があり、学校とは違った場所で作業を行うことで、働く意識付けができると感じた。

○作業の様子・生徒の様子

体験日の日、教室に集合するとすぐに行うのは検温である。老人ホームでの作業と言うことで、参加者全員の検温が義務付けられている。マスクも必須である。移動は徒歩で、先方に着くと、担当の方に挨拶をし、作業場所に案内される。その日の作業になる洗ったばかりのタオルを洗濯室に取りに行く。洗濯室の人は分かっている、カートに入ったたくさんのタオルを渡してくれる。生徒たちで受け取り、先ほどの小部屋に戻り、たたみの作業が始まる。「たたみ」の作業は使用場所によって2種類のタオルがあり、たたみ方が異なっている。参加生徒の実態は違いをよく理解して、丁寧にたたむことのできる生徒、言葉かけを受けて正確にたたもうと、努力を見せる生徒、早く終わらせてしまおうとする生徒など様々である。教員は間違いが無いか見守りながら適宜言

葉かけをしていく。仕上がったタオル、エプロンは種類別にカートに戻し、洗濯室に持っていく。先方の人との「よろしくお願いします」「ありがとう」のやりとりで作業は終了となる。

9月の作業日の時には施設内を案内して頂いた。コロナ禍以後ということではあるが、入所者と直接関わることは難しかった。部屋の外から挨拶をしながら過ごしの様子を見学させて頂いた。食事の様子、個室、また個室用の便座なども見せて頂いた。老人ホームの中を見る機会はありませんとのことで、生徒たちも、自分たちの祖父母より高齢の方たちの過ごしの場所、様子を興味を持って見学していた。

○生徒・保護者・施設・学校～それぞれの変容

5月から、参加生徒たちは、ほぼ毎月1回ではあるが定期的に地域の外部施設に通って作業を行ってきた。今まで、地域での活動はその单元の中のみ、単発での活動が主であったが、今年度は年間を通して行うことができた。

(生徒)：初め、緊張していたようだが、施設の方にしっかりと挨拶をすることができた。施設の方とのやりとりそのものは少ないものの、行った仕事に対して学校以外の人からの「ありがとう」と言われたことはうれしい様子であった。仕事(たたみ)についても次第にできるようになってくると「指示を聞いてできるようになりとても楽しかった。」との感想があった。

(保護者)：その日の様子、生徒の感想が書かれた作業日誌の内容で知ることになる。施設での体験は、「良い勉強になった。いつもと違う緊張感の中説明を聞くなど、苦手なことに挑戦するのは成長につながり、最終的には自信につながると思います。」など肯定的に捉えてくださる方がほとんどであった。家庭でも手伝いとしてたたみ方の練習をするなど協力して頂いた。

(施設)：金沢支援学校の存在は近隣にあるということで知ってはいたが、交流がなければ分からなかった。定期的に生徒が来ることは自然なことになっている。今後もぜひ来てほしい。毎回とても助かっている。他の支援学校の卒業生も働いている。

(学校)：「はまかぜ」の引率教員は2名であるが、体制が許す限り、違う教員が行けるようにした。地域との関わりを継続的に行うことは貴重な機会でもある。対外的な関りがあることで、外からの視点ができ、教員も良い緊張感につながったと思う。

○まとめ

3年生は卒業後の進路先を決めるために、全員が地域の事業所に実習に出ることになる。その合間を縫うように一部の生徒のみではあるが、年間を通して地域の施設に通い作業を行ってきた。月1回の実質1時間にも満たない短い時間、「連携・協働」というには細やかな活動ではある。しかし継続して取り組む、ということは確実に関わってきた人(生徒・施設・保護者・教員)に残ったものがあると感じる。

生徒は学校とは違う場所での緊張感のある活動のなかで自信を付けてきた。保護者とも日誌のやり取りを通し、外部に出ることへの理解を示し、家庭でもたたみの練習をするなど活動への協力をしてくれた。

施設側も学校の存在について知るところから、通ってくる生徒を知り、活動も定着してきた。教員も近隣の施設、人との対外的な関わりの中での生徒の様子、成長を知ることができた。

★地域での活動を通して、卒業学年の教員の考えや生徒たちに培ってほしい力

- ・主体的に動ける社会人、感謝を忘れない社会人、どんな時も謙虚な社会人、失敗から立ち上がる力（レジリエンス）…「できなかった」ではなく「どうすればできるか」を考える柔軟性。
- ・職業とは違った場所や作業内容、実習とは異なる体験の中で自分の役割を理解し、働くことへの達成感や意欲的に仕事に取り組む力を養ってほしい。相手や場面に応じた適切な挨拶や会話、態度を身に付けてほしい。
- ・地域での活動は日頃学習に勤しむ生徒の姿を見てもらい知ってもらう貴重な機会であり、知ってもらふこと、受け入れてもらうことは生徒の進路選択において重要なポイントだと思われるため、今後も増えてほしい。生徒自身には支援を快く受け入れる力や、誰とでも平等に関われる力を身に付けてほしい。

5 考察

今年度に入り、1年生が入学し、学部の教員も変わったところで、本テーマでの研究は2年目を迎えた。昨年度はそれぞれの学年で地域に関する授業に取り組みつつ、研究の方向性を探ってきた。また、これまでの高等部の地域での活動について調べることを行ってきた。

今年度については新しい学年になったところで、より実践的な地域での活動をそれぞれの学年で行うこととし、授業を積み重ねてきた。各学年のねらいと授業後の変化は次の通りである。

1年生は、高等部での本校で1年次に取り上げている「南部市場」を題材に研究を行ってきた。ねらいとして、①地域を知る、②「身に付けたい力」との関連を挙げ、社会生活と総合の教科で主に取り組んだ。授業後の変化として、生徒は「南部市場」を知ったことでその場所への興味・関心、地域への魅力が高まった。相手先も本校の作成物を掲示するなど快く受け入れて頂いた。

2年生は、学年のサブテーマ「彩り…回りまわって地域貢献」を立ち上げ、「職業」、「校内実習」の作業学習での活動を中心に研究を重ねてきた。ねらいとして、地域と関わることで、①作業能力、意欲の向上、②自己有用感の育み、③他者との関係性における肯定感を挙げている。

授業後の変化として、実習を重ねるごとに作業の精度が上がり、また相手先と直接やり取りをすることで、生徒自身も責任感や自己有用感を感じることができた。事業者側も精度の高さを認識することが挙げられた。事業所との関係性を深め、依頼内容を柔軟に調整・拡大し、協働体制の安定化につながられた。

3年生は、例年本校の3年生が行っている、特別養護老人ホーム「富岡はまかぜ」での活動を取り上げた。この活動は年間を通して行っているものである。外部施設での活動を通して①働く意欲・意識付け、②働く姿勢やマナー、ルールを身に付ける、③責任感や役割意識をねらいとしている。

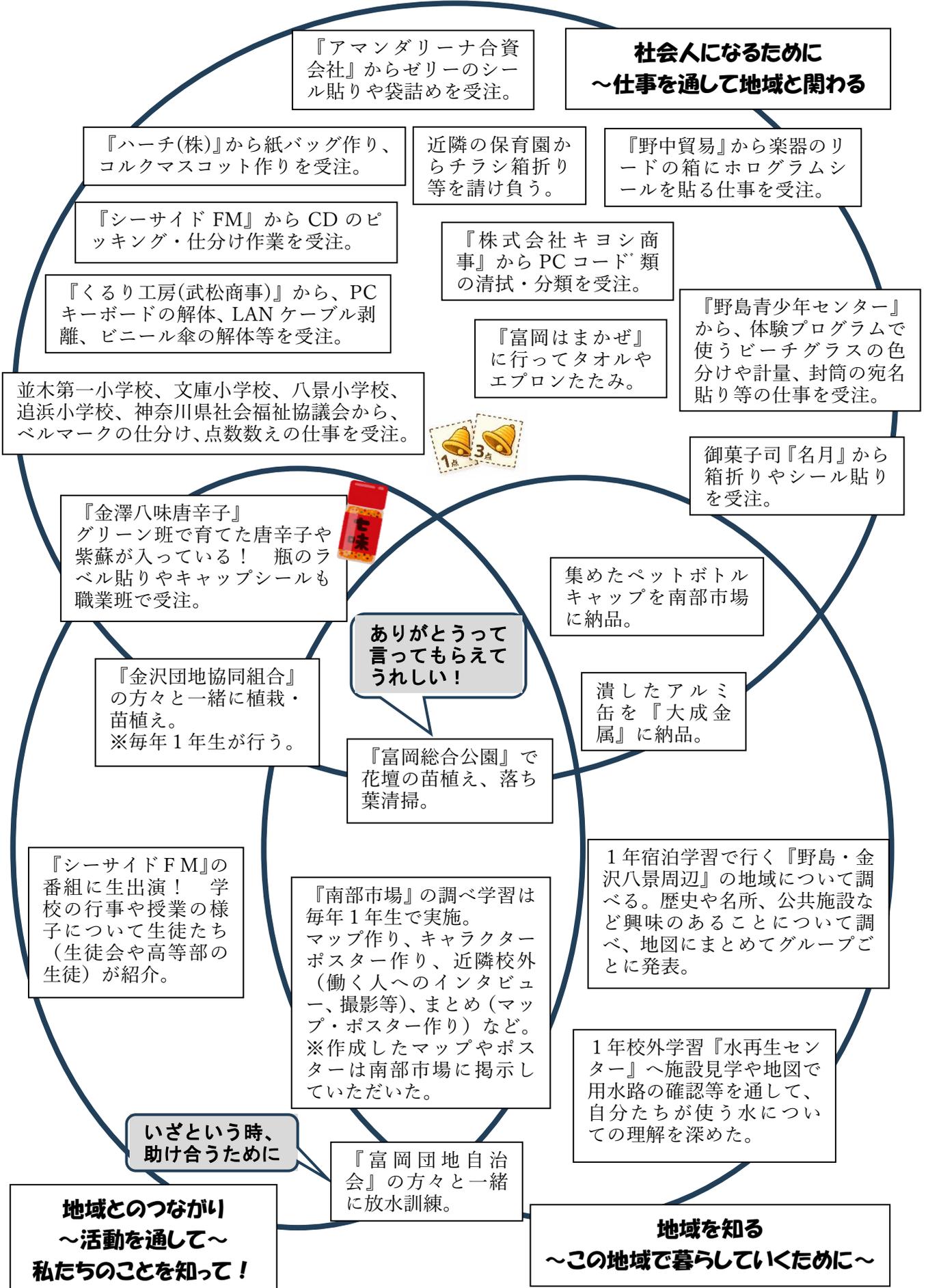
授業後の変化として、生徒については施設への興味関心や、学校ではない場所で作業ができるようになったことへの自信と意欲、保護者は、学校の近隣の施設を知る、多様な経験を積むことへの肯定感、教員も引率を通して外部から学校を見るという新たな視点を得られた。

このように実態も全く違う三学年が、地域というテーマでそれぞれの切り口、アプローチで研究に取り組んできた。それぞれの学年で得たものは、相手先とのより良い関係性や、知る、知られることでの信頼の醸成、それによって生徒の成長が促されてきたことである。

6 まとめ

2年目の研究も各学年での取り組みを中心に行われてきた。各学年毎の実態の大きな違いや、人数の多さにより、学部全体でのまとまりのある活動への難しさもあったが、結果的に各学年の特色が良く表れた活動報告ができた。いずれの学年でも活動を通じて生徒の大きな成長を見ることができた。また受け入れ側の地域施設や事業所についても、知る、知られることでの人材活用、人脈の広がり、地域としての活性化につながっている。学校としても地域に本校の生徒を知ってもらうことで、活動に対して理解や協力が得られやすくなった。閉鎖的な環境になりがちな学校の教員も多様な価値観の方と接することで新たな視点を持つことができたのではないかな。

この2年間の「地域との連携・協働を目指した授業づくり」の研究を行ってきて、あらためて本校の恵まれた社会資源の豊かさを思う。職業では毎回当たり前のように近隣の会社（楽器店、菓子店）からの受注作業があり、実習でしか経験することのできない本物の製品を使っただけの緊張感のある生きた作業体験を毎回行うことができる。徒歩で行ける大きな商業施設「南部市場」は高等部に限らず、全学部を通じて社会経験を学ぶ場となっている、学校の目の前には富岡自然公園という豊かな自然もある。地域との関わりを深めていくということは金沢支援学校の独自性を深めていくことに他ならない。



高等部B（知的障害）教育部門 横浜氷取沢分教室
研究サブテーマ：～

1 高等部サブテーマ

「よりよい実践へ～教育課程との融合を考える」

昨年度からのテーマである「地域資源の活用」が生徒にとって意義あるものとなるためには、事前・事後学習をふくめたひとつの学習のまとまりとして、教育課程に位置付けることが必要となる。教育課程に位置付けるということは、どの教科で、どんなねらいで、どんな方法で学ぶのか検討することであり、そのようにして位置付けられた学習は、毎年繰り返されることでノウハウが積み重なり、振り返りを通して改善されていくと思われる。また、位置付けが明確にされていれば、ねらいそのものを変えることなく、生徒の実態やニーズに合わせた学習内容や方法のアレンジが可能となる。教員の入れ替わりが多く、経験・知識・技術が継承されにくい現状において、授業のベースとなる計画を、個人レベルのものから学部全体のものに引き上げて整えておくことは、不可欠である。本校では令和5年度に「金沢支援学校 身につけたい力の内容表」が作成されており、自立と社会参加に向けて生徒に身につけてほしい力が、カテゴリー別・段階別にリスト化されている。また、同年度の校内研究において分教室で検討した「進路に関わる1年間の流れ 授業内容案」では、必要と思われる学習内容が学年ごとに整理され、これらをもとにした一貫性のある年間指導計画やシラバス作成が今後の課題としてあげられている。これらもふまえながら昨年度の実践をより深め、学習を通して生徒が学んだことを生徒の視点から明らかにし、学習内容やその方法の妥当性について考察したい。そして、職員間で認識を共有することが教育課程のさらなる整備に必要と考え、今回のサブテーマおよび目的を決定した。

2 研究の目的

- ・地域資源を活用した実践のねらいについて、職員間で共通理解を図る
- ・「職業」のねらいについて、職員間で共通理解を図る

3 研究の方法

1年生の職場体験（および校内実習）の事前事後学習を題材に、以下の方法で行った。

- ①分教室の教育課程について知る
- ②各教科における学習指導要領のねらいや内容を知る
- ③過去の実践や資料をもとに、事前事後学習の計画を作る
- ④各授業の内容について、学習指導要領に記されている教科のねらい・内容と照らし合わせ、必要に応じて修正する
- ⑤生徒の実態を考え、身につけてほしい力とその実践を行う授業について再度検討し、計画をブラッシュアップする
- ⑥実践
- ⑦生徒と授業者の振り返りをもとに、生徒が学んだことと、授業の妥当性について振り返る
- ⑧⑦の振り返りおよび過去の資料をもとに、職業のねらいについて検討する
- ⑨職業のねらい案を作成する

4 経過

時期	行なったこと
4月	・今年度の研究内容の検討および決定

5月	<ul style="list-style-type: none"> ・サブテーマの検討および決定 ・分教室の教育課程編成報告書の読み込み <p>日課表の名称と、学習指導要領の各教科等の関連を知るために実施。</p>
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生「職場体験・校内実習」学習計画の検討① <p>国語・職業・家庭・自立活動について、学習指導要領の読み込み →必要に応じて、学習計画を修正</p> <p>教科ごとに2～3名のグループを作り、内容の検討を行った。授業者が示した素案に加筆・修正していく形をとった。</p>
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生「職場体験・校内実習」学習計画の検討② <p>「コミュニケーションに関する学習」について取り上げて検討</p> <p>コミュニケーション面での生徒の実態・見立て・適した学習内容や方法について、付箋に書き込みながら意見交換した。</p>
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生「職場体験・校内実習」学習計画【資料1】の決定 <p>前回の意見交換の結果を反映させたあらたな学習計画を共有した</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践準備
9月～10月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業実践
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の振り返り <p>実習日誌・振り返りシートに書かれた生徒の記述および各授業における授業者の振り返りをもとに資料を作成した。</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の振り返りの共有 ・「職業」これまでのねらいの洗い出しおよび統一にむけた意見交換 <p>令和4年度から令和7年度までの「職業」年間授業計画のねらいを一覧にして比較検討し、学習指導要領での該当する教科（「職業」「家庭」「自立活動」との関連づけを行った。</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究報告作成
1月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・「職業」統一されたねらい案の検討および決定 ・次年度「進路学習」年間授業計画（1年生）のひな型作成

※1～3月については令和7年12月時点での計画である。

5 結果と考察

①生徒の振り返り【日誌・振り返りシートから生徒の記述を抜粋】と考察
職場実習をして思ったこと

- ・これならできると思いながら作業した。
- ・できることがふえていってホッとした。
- ・自分的に、相手が（に）聞こえる声で報告・連絡できた。
- ・郵便局の皆さんに、かいた絵をほめられてすごく嬉しかったです。
- ・難しい仕事もあれば簡単な仕事もあって、郵便局の仕事って大変なんだなあと思った。
- ・とても将来のために勉強になると思った。
- ・飲料の補充は賞味期限が長い商品を奥までつめ、細かい作業だと思った。
- ・商品の種類が多くてとても大変だと思った。
- ・緊張したり疲れたりしましたが、順調に作業に取り組めたと思いました。
- ・働く体験をして、困った時に相談することを頑張った。
- ・担当者に質問することができた。
- ・効率よく作業することができた。
- ・慣れたら楽しい（だろう）と思った。
- ・報告・連絡・相談が大切だと思った。
- ・楽しかった。
- ・またやってみたい。
- ・作業を効率よくていねいにすばやくできるやり方を教わり、それができるようになってよかった。
- ・楽しかったし、大変だなと思った。
- ・働くことの大変さをあらためて実感した。
- ・寒いからと（いう）理由でポケットに何度か手を入れてしまいました。それが残念でした。

②「うれしい」「よかった」こと

- ・3日間続けられた。
- ・自分の目標が達成できた。
- ・商品を買ってくれてうれしかった。
- ・商品出しをやってよかった。
- ・仕事をやっているうちに「できた」とほめられた。
- ・仕事を覚えた。
- ・指示をされていないのにその前に自分で考えて行動してほめられました。
- ・店長とお話しした時、思いやりや働いていく中でお互いに支えあって（いることを知り）自分のなかではそこがよかった。
- ・商品の賞味期限が切れているのを担当の〇〇さんと見つけて、「見つけてくれてありがとう」とほめられた。
- ・できるだけミスがなく仕事にとりくめた。
- ・ふだんさわることができないレジをさわることができた。

【考察】

多くの生徒が、自分が行った作業を具体的に書き出すことができ、また、できたという実感を素直に表現していた。体験先で生徒が理解しやすく取り組みやすい作業を用意していただいたことや、生徒の実態に合わせて丁寧に支援して下さったことで、生徒がすすんで作業でき、達成感を持つことができたのだろうと考えられる。

変化への抵抗が強く、見通しが持てないことで不安が強くなる・複数の作業を同時に行うことが苦手・他者と関わる場面で求められる暗黙のルールに気づきにくいなどといった特性が先に立って困り感を抱き、学習や作業へのモチベーションが下がってしまいやすい生徒が多いが、そういった困り感を抱かず、本来求められる作業に取り組めたことで、生徒自ら「学んだ」「できた」と実感できたことが大変良かった。

振り返りで、ほめられたことが嬉しかったと書いている生徒が数名いた。日頃の言動から、自信のなさが感じられる生徒が少なくないが、他者から承認されることで自分の良さを確認し、自己肯定感を高めることにつながったのではないかと。特に、家族や教員ではない他者から、自分が頑張った結果について認められるという経験は、職場体験の大きな意義であると思われた。

コミュニケーションに苦手意識を持つ生徒にとっても、なじみのない他者に対して聞こえる声で話ができたり、報連相ができたりしたことに達成感を抱く機会となった。いっぽうで、返事やあいさつについて振り返りで言及する生徒はほとんどいなかった。自分の課題としてあげた生徒はいたが、前向きな評価を書いた生徒はいなかった。あいさつ・返事は、学習内容の検討の段階から教員としてはもっとも大切なスキルと考え、事前学習でも取り上げてロールプレイを行なったが、振り返りで生徒の記述が全くと言ってよいほどなかった。職場体験中、意識してできている生徒が多かったにも関わらず、であった。生徒にとってもできて当たり前だったためか、または、生徒にとってはあいさつ・返事よりも他のことのほうが学んだ手応えとして強かったためなのか、そのあたりは不明である。振り返りに項目を用意し、教員の意図と生徒の学びの違いについて検討することができればよかった。

生徒の振り返りから、具体的な作業ができたこと、そのことを認められたことへの安心感や達成感が非常に大切であることがわかった。とくにその作業が「仕事」であり、教室での学習活動ではないことに大きな意味があることが感じられた。高等部段階の生徒にとって、地域で働く経験が欠かせないと思われた。現場実習だけでなく、日頃から地域の他者とつながり、他者から認められたり、できると感じたりすることを通して将来の社会生活に必要な力が蓄えられると感じられた。

②事前事後学習の振り返りと考察

- ・7月の研究で協議し、9月の研究で決定した内容を加えた事前事後学習を実施した。
- ・それぞれの授業での生徒の様子について、授業者による振り返りを以下に記述した。

日時・教科 (日課表の)	内容	生徒の様子・教員による評価
9/30 火 5 職業	・オリエンテーション	・日程、体験場所、グループなどの視覚情報に非常によく注目した。実習への不安を口にする生徒もいたが、概要は理解できた様子であった。 ・体験の目的についての発問に対し、「できることを増やす」と的確な回答をした生徒がいた。
10/2 木 2 国語	・グループ目標決め	・話し合っって目標を決める形をとったが、グループによっては意見をまとめることが難しく、教員の介入に工夫が必要であると思われた。
10/2 木 5 情報	・個人目標決め ・発表資料作り	・自分で考えて言葉にすることができていたが、具体的な目標にするための支援が必要であった。 ・プレゼンテーションソフトの使用については、自分でできる生徒がほとんどであった。
10/3 金 34 進路学習	・実習激励会 (全学年)	・上級生の発表に注目することができていた。 ・生徒によってはメモを取ることができていた。 ・グループリーダーは、職場体験の目標を落ち着いて発表することができた。
10/6 月 2 国語	・職場体験日誌作成	・目標、学校の住所、体験の情報などを、資料を参照し転記する作業を行ない、書字速度の差はあるものの、全員が記入できた。 ・知りたい情報がどこにあるか思いつかず混乱する生徒

		には、手順を省略せず伝えることが求められた。
10/7 火 5 職業	・ロールプレイ① 「あいさつ・返事」	・手順を理解し、グループで役割交代しながらロールプレイすることができた。日常の場面では積極的に言わない生徒も、台本に沿って声を出して言うことができた。ロールプレイに抵抗感を示す生徒はいなかった。
10/9 木 2 国語	・ロールプレイ② 「クッション言葉」	・前回同様、ほとんどの生徒がロールプレイを行うことができた。仲間の演技に関心を持って見続ける、拍手をするといった行動がより自然に出るとよいと思われた。
10/10 金 34 進路学習	・近隣校外学習 「職場訪問」	・実際に職場へ行き、あいさつをした。ロールプレイで行なったことを意識して声を出そうとする様子がみられたが、緊張する生徒も少なくなかった。訪問先から戻ってきた時には不安そうな様子を見せている生徒が数名いた。
10/10 金 5 職業	・職場体験激励会 (1学年のみ)	・一人ずつ前に出て、個人目標を発表した。教室内ということもあり、落ち着いて発表できた。 ・板書された配置図を見て、自分たちで声をかけあって椅子の設置ができた。 ・プログラムの「気合い入れ」という文言から数名の生徒が自発的に円陣を組み、ほかの生徒を巻き込んで声を合わせる様子がみられた。
10/14～16 職場体験		
10/17 金 2～4 職業	・お礼状作成	・仕事内容・感じたことの2点について、自分の言葉で振り返ることができた。生徒によっては教員が発問したり選択肢を示したりすることで文章を組み立てることができた。 ・パターンを指定し、前文や後付は見本を視写することでスムーズに書くことができた。 ・お礼状の意味や相手を不快にさせない表現をわかりやすく具体的に伝える必要があった。
10/17 金 5 職業	・校内実習日誌記入 ・作業の紹介 ・個人目標の見直し	・混乱を防ぐため、校内実習についての具体的な情報はこの時間にはじめて提示することで、職場体験から切り替えができた。 ・3年生による作業の説明によく注目していた。 ・職場体験でできたことをもとに、校内実習の個人目標をステップアップさせる生徒がいた。
10/20～24 校内実習		
10/27 月 2～4 職業	・校内実習の振り返り ・蔵書点検 蔵書点検:横浜水取沢高校より毎年依頼される、図書の確認作業	・自分が行なった作業について、「できた・まあまあ・苦労した」の3択で回答を求めたところ、多くの生徒が「できた」を選ぶことができた。 ・実習前後での緊張・不安の変化を比較する質問に対し、心情を的確に振り返って回答できていた。
10/30 木 2 国語	・発表資料作り	・相手に読みやすい資料のポイントを理解し、それを守って資料を作ることができていた。 ・「目標に対するふりかえり」の項目でどのようなこと

		を書くかについて迷う生徒が数名いた。具体例を示すことで理解できた。
10/30 木 5 情報	・発表 ・実習報告会での発表に向けた話し合い	・一人ずつ前に出て、振り返りを発表した。教室内ということもあり、落ち着いて発表できた。 ・グループで、職場体験について思い出して話し合う活動を行なった。教員が適宜介入することで意見交換ができていたが、職場体験の欠席が多かったグループでは進行が難しく、話し合い活動については工夫が必要と思われた。
10/31 金 34 進路学習	・実習報告会 (全学年)	・上級生の発表に注目することができていた。 ・生徒によってはメモを取ることができていた。 ・グループリーダーは、職場体験の報告を落ち着いて発表することができた。

【考察】

地域とつながる活動をよりよい形で継続させるべく、おもに職業に関する学習を見直す機会を持った。「その活動はどの教科で実施するのが適切か」「学習指導要領のどの部分に内容の根拠があるか」を考えたことで、各授業のねらいが明確になり、その授業を行う意味、内容と方法、何ができるようになってほしいかという願いが生徒に伝えやすかったように思う。その中で、内容とふさわしい教科についてあらためて考えさせられるような気づきがあった。

たとえば、10月17日に実施した職場体験のお礼状作成は、職場体験の延長と考えて職業の授業として実施したが、文字の形や大きさを意識して丁寧に書くこと、体験したことを言葉にして文章に組み立てること、手紙の形式を知ることなどの要素から、国語として実施したほうが適切だったのでは、ということに気づいた。お礼状を書くという活動だけで授業を考えると、それがどの教科のねらい・内容と合うのかあいまいなままになってしまうと感じた。今回の研究で活動と学習指導要領を結びつけるプロセスを経たことで、根拠のある学習を組み立てるきっかけになるのではないと思われた。それは評価基準が明確になることでもあり、生徒に対してできたことを具体的にフィードバックできるということにもつながる。生徒が学習に意味を感じモチベーションを保てるということは、知的障害だけでなく、自閉症、ADHD、学習障害などの状態像も併せ持つことが多い生徒の学びの継続に有用なはずである。

分教室で学ぶ生徒の大部分に共通する実態として、学習に対して真面目で素直に取り組む一方で、特にコミュニケーション面において、状況に応じて求められる適切な言動について未学習あるいは誤学習ということがある。うまくいかないと感じる経験が積み重なり、自分に自信を持てなかったり、失敗や間違えることに対して過度に臆病になったり、常に不安を感じていたりといった二次的な問題が生じていると予想される生徒も少なくない。実習も含め、地域に出ていく活動において、二次障害の存在は大きな壁となっていると思われる。

7月の研究でコミュニケーションの学習内容について検討した際、最も話題に上がったのがコミュニケーションスキルの低さと自己肯定感の低さであった。あいさつや返事といった、社会人としての基本と考えられる行動が実は一番難しいという意見で一致し、その背景には、そもそもスキルの未修得があるのではという話になり、ビジネスコミュニケーションのロールプレイを行うこととした(10月7日と9日)。授業は、決められたセリフを役割交代しながら言うという単純な方法で、やることを明確にしたこともあり、生徒は楽しみながら意欲的にロールプレイに参加できた。また、直後に実践の機会を設けたことで、生徒に学習のつながりや意味が伝わった。今後も行えるとよいと思われた。

コミュニケーションについては、話し合い活動(10月2日と30日)でも、話を聞くときに求められる態度、意見の言い方、すりあわせ方などにおいて学習経験の乏しさが感じられた。もともと持つ

ている認知特性から、他者の心情を想像することや状況に応じて話す・聞くという役割交代をすること、適切な表現方法を選ぶことが難しい生徒が多いが、こういったことはすべて、実は自立活動の指導内容に含まれている要素である。分教室の生徒は知的障害の程度は軽度が主であるが、授業全般において、各教科のねらいに加えて自立活動の内容、特に人間関係づくりやコミュニケーションに関する内容を意識する必要があると思われた。その意味で、分教室の時間割「職業」に自立活動が含まれていることは意義深く、自立活動の内容にもとづくねらいの設定や、作業場面での個に応じた環境調整を行うことも求められていることは明らかであろう。「自立と社会参加」という言葉から分教室の生徒について考えるとき、社会人として必要なルールやマナーを身に付けること、指示に従い仕事ができること、集団の中で行動できることなどが念頭に置かれることは自然である。そして、集団を前提として指導することも適切であると思われる。しかし、特別支援学校における教育課程の特徴として、自立活動があることは高等部の分教室であっても同様である。学校教育の出口に近い場所だからこそ、一人ひとりの実態把握と見立てを行い、支援者間で共有していくことや、生徒自身に返して自己理解を促すことが求められるであろう。

③職業の「ねらい」統一に向けた意見交換について

分教室の職業における年間授業計画の「ねらい」は、これまで、作成する学年・職業班の担当教員の裁量によって決められて書かれてきた経緯があるが、これまでの研究の積み重ねから、分教室として統一されたねらいを作ることが必要と考えられ、今年度、統一した「ねらい」案を作成することとなった。そこで12月の研究で、令和4年度（現行の学習指導要領が完全実施となった年度）から今年度までの職業の「ねらい」を洗い出し、学習指導要領と対応させながら意見交換を行なった。

分教室では、それまで学年別の実施であった職業を、令和6年度から3学年縦割り実施としたが、ねらいは従前のものから変えることはなく、ほぼ毎年度、以下の3点であった。抽出したキーワードを示す。

目標1：就労・マナー・ルール・言葉遣い・技能・態度・コミュニケーション能力・スキル
行動できる・行動に移せる・身につける・獲得をめざす
目標2：さまざまな作業・経験・得意・不得意（苦手）・進路選択
目標3：働く意味・喜び・意欲 高める・育てる

目標1は高等部学習指導要領「職業」の内容との関連が強く、目標2は生徒が自分自身について知るといふ点から、自立活動の内容を反映したものではないかと思われた。また、目標3は現行の高等部学習指導要領「職業」の内容の最初にあげられている「勤労の意義」を意識したものと思われた。目標に対する意見として以下のことがあげられた。

- ・生徒の実態の多様化から、働く＝就労という表現を検討したほうがよい
- ・ルールやマナー、言葉遣いを身につけさせることに重きを置いている印象を受けるが、すべての学習を通して行うものであるという意識を持ちたい
- ・勤労の意義について、目標の最初に持っていきたい
- ・高等部学習指導要領「家庭」のねらいとの関連も考える必要がある
- ・ねらいとは直接関係ないが、生徒が自分自身を環境に適応させるだけでなく、個の実態に応じた環境調整を行うことへの意識も持てるとよい

年度内に、統一した「ねらい」について案を示し、決定できるとよいと考えている。

6 今後の課題

考察をふまえ、今後の課題を二つの視点から検討した。二つの視点は対極にあるが、どちらも大切にしていくことが分教室に求められると思われる。

全体の視点から

①分教室としての年間授業計画づくり

現状

- ・「身に付けたい力の内容表」がある
- ・「発達段階に応じた」「系統性のある」指導をすすめてきた
→進路に関する学習については、ある程度の形ができつつある段階
- ・地域資源を活用することで生徒がどのような学びを得られるのかわかった
→継続し、改善できるように指導計画に落としこんだ【今年度の研究】

今後必要と思われること

- ・分教室の生徒の実態に応じた身に付けたい力について検討し、その達成のための学習内容を、学習指導要領にもとづきピックアップ、何年生で実施するかを検討、「シラバス」を作る
- ・「シラバス」の内容を整理する
たとえば
 - ・複数の授業にまたがる学習内容を教科ごとに振り分ける
 - ・SSTなどの学習をどの教科として扱うのかを検討する
 - ・多岐にわたる行事の事前事後学習をどの教科で扱うのかを検討する
- ・最終的に、分教室としての年間授業計画を作る

個の視点から

②自立活動の内容をふまえた個への対応・環境調整の実践例積み上げ

現状

- ・今年度の研究を通し、職業の授業に自立活動が含まれていることへの意識が高まった
- ・生徒の実態の多様化、とくに自閉症をはじめとする発達障害を併せ持つ生徒の増加
→知的障害に加え、発達障害の認知特性をふまえた対応が求められている
- ・不登校や対人不安を抱える生徒の増加→医療・心理・福祉など他職種と連携した柔軟な対応や進路選択が求められている

今後必要と思われること

- ・事例検討（ケース会）を定期的に行い、すべての職員の研修の機会とする

【具体的な方法例】

- ・検討したい生徒の事例をあげる（たとえば各学年1事例、分教室全体で1事例など）
- ・学期に1回のペースで事例検討会を設ける・・・学部研修の日を活用する
- ・他職種の視点を得るためにコーディネーター、専門職などに同席してもらう
[初回]・見立て（実態や行動の背景についての検討）・生徒のニーズの把握をする
・適切な環境調整を考える（「医療モデル」から「社会モデル」への考え方の転換）
[2回目] 経過報告、必要に応じて対応の変更など検討
[3回目] 経過報告、実践の振り返り

1年生 職場体験・校内実習 学習の予定 案（2025年9月24日版）

資料1

- 【学習全体のねらい】
- ・職場体験と校内実習の意義を理解し、目的を持って主体的・意欲的に取り組む。
 - ・働く場面で成功体験を得ることで、自分の良いところを知り、自信を持つ。

日時	授業名	おおまかな内容
9月30日（火）5校時	職業	【オリエンテーション】 ・目的・日程・内容 ・健康管理（休憩・休日・衣服の調節・食事等）
10月2日（月）2・5校時	国語 情報	【発表資料を作ろう】 ・グループおよび個人目標作り・発表（考えを明確にする・わかりやすく話す） ・PCを使ってスライドを作成する
10月3日（金）3・4校時	進路学習	【激励会に参加しよう】 ・グループ目標を発表する ・先輩や友達の発表を聞く ・メモを取る（働く場面で必要な態度のひとつ）
10月6日（月）2校時	国語	【日誌を書こう】 ・目標、住所や電話番号などを書く（文法、字の形やバランスなどに留意する）
10月7日（火）5校時	職業	【コミュニケーションを学ぼう】 ・あいさつと返事のロールプレイ（働く場面での振る舞い方）
10月9日（木）2校時	職業	【コミュニケーションを学ぼう】 ・あいさつと返事のロールプレイ（働く場面での振る舞い方）
10月10日（金）3・4校時	進路学習	【コミュニケーションを学ぼう】（近隣校外学習） ・体験場所に行き、あいさつと返事を実践する
10月10日（金）5校時	進路学習	【ミニ激励会・教室整備】 ・自分の目標を発表する ・友達の発表を聞く ・教室整備（友達と協力してさまざまな活動を行う）
10月14日（火）～16日（木）	職業	職場体験
10月17日（金）	職業	【職場体験をふりかえろう】 ・がんばったことやできたこと、目標が達成できたかどうか等をふりかえる

		【お礼状を書こう】 ※ビジネスマナーとしての手紙 ・振り返りシートに記入→下書き→文章に組み立て 【校内実習オリエンテーション】 ・目的・日程・内容、先輩の見学 ・健康管理（休憩・休日・衣服の調節・食事等）	
10月20日(月)～24日(金)	職業	校内実習	
10月27日(月) 2～4校時	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">職業</div> 国語	【蔵書点検をしよう】 ・図書室の蔵書点検作業を行う	【実習をふりかえろう】 ・実習で行ったことや学んだことを表現する
10月28日(火) 5校時	職業	【蔵書点検をしよう】 ・図書室の蔵書点検作業を行う	【実習をふりかえろう】 ・実習で行ったことや学んだことを表現する
10月30日(木) 2・5校時	国語 情報	【発表資料を作ろう・ミニ報告会】 ・PCを使ってスライドを作成する	・発表（相手にわかりやすく話す）
10月31日(金) 3・4校時	進路学習	【報告会に参加しよう】 ・職場体験について発表する ・メモを取る（働く場面で必要な態度のひとつ）	・先輩や友達の発表を聞く



Kanazawa
Seaside
Gakuen

神奈川県立金沢支援学校

郵便番号	236-0051
住所	横浜市金沢区富岡東2-6-1
電話番号	045-770-0456
F A X	045-775-4121
ホームページ	http://www.pen-kanagawa.ed.jp/kanazawa-sh/